GENTENKAIKI

原点廻帰

～あるガバナーの記録より～

国際ロータリー第2760地区
2006～2007年度ガバナー
医療法人 豊寿会 斉藤病院理事長
斎藤直美

GENTENKAIKI

原点回帰

～あるガバナーの記録より～

国際ロータリー第2760地区
2006～2007年度ガバナー
医療法人 豊寿会 斉藤病院理事長
齋藤直美

原点回帰

～あるガバナーの記録より～

齋藤直美
国際ロータリー第二七六〇地区二〇〇六～二〇〇七年度ガバナー
医療法人 豊寿会　斉藤病院理事長

まえがき

尊敬する盟友、齋藤直美君
『原点回帰』発刊に寄せて

第二七六〇地区　パストガバナー　豊島　徳三

齋藤直美君からお電話を頂き、今回ご自身が第二七六〇地区ガバナー時代（二〇〇六～二〇〇七年度）を中心にエッセイ集を出版されるとの由。素晴らしい試みですねと申しました所、ついては、私に巻頭の辞を引き受けて欲しいとのお話でした。

元来、ロータリーそのものについても、識見、理解度、実績、風格、何をとっても及びもつかない私。また、私の文才をもってしても極めて重く、ご辞退を申し上げたい所でしたが、常々尊敬し、魅力的なお人柄を感じていた齋藤君の事とて、敢えて自らを省みずお引き受け致しました。

最初、ガバナーとしてお会いした時は、正直いって茫洋たる感じ、一見飄々として居られるご様子と、拝見しましたが、お付合いが深まるにつれて私は誤りを悟り、内

心忸怩たる思いでした。確たる信念、ロータリアンとしての理念を堅持しておられる「芯」の坐った方でした。それは、ロータリー活動の中でも、正しき道を明確に指し示される実行の方でした。その一つが、第二七六〇地区と第二六三〇地区に呼びかけ、合意の下に「中部名古屋みらいロータリークラブ」の創立を提唱し、特別代表を務められ、二〇〇八年五月二十四日認証状伝達式に導かれた事でも十二分に立証されたと思います。

一方では、二〇〇八年五月、GSE激励と称して、第一七八〇地区、南フランスへご一緒した時です。ご本人は、リヨンで英気を養われたらしく、いつの間にか現われ、何故フランスでそうなのか理解できませんが、キムチの香りも豊かに、風の如く立ち去る極めてユニークな行動でした。でも、交歓例会には出席し、短いスピーチは全うされました。多分、私がそういう行動に出たら、顰蹙（ひんしゅく）を買ってブーイングにあったと思います。この辺りが齋藤君のお人柄だと思いました。本書は、こういった齋藤君のご労作。きっと私どもロータリアンとして心得るべきこと、進むべき道、理想像等をご教示いただける集大成としてご期待申し上げてやみません。すべての人にとって、優れたものの座右の書として、ご一読願えれば友人としても幸せに存じます。

はじめに

二〇〇四年・秋。私はＲＩ第二七六〇地区のガバナーノミニーに選出されました。このことは、我が人生六十五年の中で医学部の合格に匹敵する大きな出来事でした。二つの出来事は我が身の実力からして、及びそうで及ばない事と考え、我が身の外へ置き考えないようにしていたのですが、こればかりは運命のなせるいたずら、めぐり合わせとでも申しましょうか、この運命を受けることになりました。

ロータリーに入会させていただいて二十五年が経ちましたが、ランチタイムの会あるいは、豊田地区の事業家の皆様との交流会と割り切り、ロータリーの勉強もせずにきてしまいました。二〇〇〇～二〇〇一年度豊田ロータリークラブの副会長に〝順番だから〟と言われ指名された時は慌てました。二年後の会長の時は何をすべきなのか、まったく解らないのです。誰も教えてくれないのです。

ある日、豊田ロータリークラブ事務局の書庫を漁っていると「ロータリーに関する十四の断章」（松井幸雄著）「ロータリークラブ」（小堀憲助著）の二冊が目にとまり、手にしました。私は、読み進むにつれてその中に引きずり込まれていきました。そこ

には今まで知らなかったロータリー情報が沢山盛り込まれ、ロータリー哲学・ロータリー知識にあふれ、初めての出会いにショックを受けました。それから二年間は文献を集め、サブノートを作り、親友の林常夫君（元豊田東ＲＣ）のアドバイスを受けました。第二五〇〇地区の故パストガバナー田巻明男氏（紋別港ＲＣ）からもご指導をいただき、会長就任の頃は理論武装した自信満々のロータリーアン気取りでした。しかし、ガバナーなんて無縁のものと思っておりました私は、ノミニー選出には本当に戸惑ったことを覚えています。

ガバナーを終えて六ヶ月も経った頃でしょうか、伊藤秀雄君（名古屋東南ＲＣ）から「本を作ったら？　ガバナー前後の記録集を作ったらいいよ。人生の大切な経験をまとめておくことが、子供達への財産ですよ」と薦めていただきました。「ガバナー事務所奮闘記」を計画していましたが、まとまらずに流れてしまった時だったので背中を押され、本書になりました。お暇な折々にでも、冷酒を片手にお読み下されば幸甚の至りです。でも、あまりに私小説的すぎて、まったく面白くありません。ですから良き睡眠薬になることを保証します。

二〇〇九年七月吉日

目次

まえがき　3
はじめに　5
第一章
縁というのは、妙なもの　13
縁というのは、妙なもの。『僕がロータリーのガバナーに？』　14
出るのか、出ないのか？　17
ここまで来たなら、やってやろう　18
リーダーに求められているものとは　22
GOVERENOR'S MONTHLY LETTER 二〇〇六～二〇〇七
月信に寄せた、ガバナーとしての想い　23
ガバナー就任にあたり　27
楽しさあってこそのロータリー　32
職業奉仕の指針「ロータリー職業倫理訓」　36
良い商品づくり、これこそ「職業奉仕」　40
エピソード　1
恩師との出会い。「キミは全然努力しないじゃないか」　43

第二章

原点回帰のはじまり　49

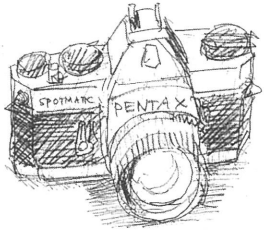
ガバナーエレクト本格始動に向けて　50
齋藤年度〝への目標を掲げて　53
良きロータリー文化を後に継承するために　54
二〇〇五年七月。ガバナーエレクト年度がスタート　56
出会いの中に大きなヒントが　58
「原点回帰」。すべて一から、見直して　60
人間の巡り合わせとは　64
国際協議会で見たもの、見えたもの　65
気品と参加と伝承と　69
時代は移り変わる　70
今伝えるべきこと。百年前を見直すこと　73
未来につづくロータリーを目指して　77
志高き、選ばれし者に　83
エピソード　2
「自己研鑽」。それは自分自身が幸せになること　87

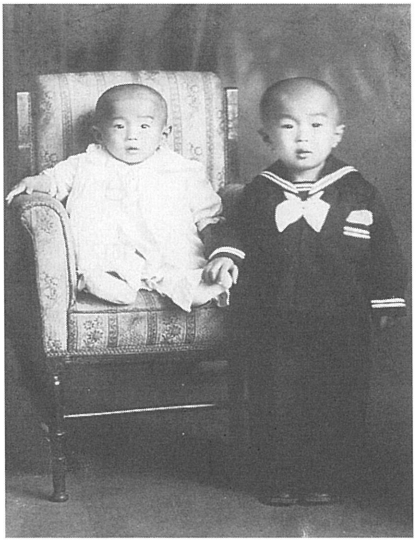
第三章

ガバナーという仕事 91

ロータリーの精神（こころ）を受け継いで 92
各クラブの〝温度〟を感じた、公式訪問 94
公式訪問を終えて 101
ガバナー最大行事、地区大会開催へ 104
感謝と感動の地区大会を終えて 109
タイ、ラオスで目の当たりにした世界の現状 112
世界理解とは… 116
IM再開で見えた、分区内同士の連携。横のつながりは〝輪〟を強くする 119
一つの目標を達成。復活したIM 121
GSEの成果と、私の〝やくざ英語〟と 124
若者たちに、夢をつなげて 129
一期一会に感謝して 131
〝野次馬ガバナー〟の一年を終えて 136
ロータリーを学ぼう 140
未来を見つめる目がくれた〝自信〟 144
一年間に幕を降ろして 148

エピソード 3
これから託すもの…
「中部名古屋みらいロータリークラブ」の設立 152
おわりに 155
あとがき 158
資料（アルバム） 161





七五三記念で撮影（右）。左は弟。

第一章

縁というのは、妙なもの

縁というのは、妙なもの。『僕がロータリーのガバナーに?』

二〇〇四年九月四日正午。岡崎ロータリークラブのパストガバナー・太田賢太郎氏から、藤井伸三君の携帯電話に連絡が入った。

「おめでとうございます。齋藤君が第二七六〇地区のガバナーノミニーに推薦されました。諮問委員会で承認されました」

ちょうどこの日、藤井君を含めた僕らは、豊田ロータリークラブのスキー同好会の仲間たちと温泉旅行へ出掛けていた。道中、蕎麦と野沢菜の旨い店での昼食を済ませた後のこの電話である。「おめでとう」と皆は口々に言ってくれたが、私は『本当に決まったのか…』と複雑な心境だった。

しかし、そもそもなぜ私がガバナーノミニーに推薦され、結果的にガバナーという大役を引き受けることになったのか。縁というものは本当に妙なもので、時に、人智を超えた不思議な力が存在するものだ。

事の発端は一年ほど前にさかのぼる。それは私が豊田ロータリークラブの会長を務め終わった二〇〇三年七月、次期会長・藤井君への新旧引き継ぎ会でのことだった。その席でガバナー補佐の伊藤康司君から声が発せられた。

「創立して五十年近くになるのに、豊田ロータリークラブから一人もガバナーが出ていない。豊田地区にあり、歴史あるロータリークラブとして非常に残念だ」

確かに豊田地区からは過去にガバナーを輩出していない。

これまでにも、一九八〇年、一九九〇年の二度、ガバナー輩出の話は持ち上がっていたものの、タイミングが合わないまま、時だけが流れた。

伊藤君は以前より豊田からガバナーを、という想いを強く持たれ、その当時第二七六〇地区ガバナーだった岡部快圓氏らに相談し続けていたという。「なんとかガバナーを豊田から出せないものか」。これは伊藤君の〝豊田ＲＣへの愛〟でもあった。

そんな中で行われた会長引き継ぎ会だったが、その場で私の前々年度豊田ロータリークラブ会長・佐々木努君がぽろりと、ひと言を発せられた。

「我がクラブからガバナーを出すなら、齋藤君しかいないんじゃないか」

お酒の勢いもあったのだろうが、そのひと言はまさに唐突、私にとっては青天の霹

靈、頭の中が真っ白になった。

『僕がガバナーに?』そんな力量が僕にあるはずがない…。我が第二七六〇地区のガバナーともなれば、全八十一クラブ、約五千二百人の会員をまとめなければならない。しかもこの地区には数々の大手企業が本社を構え、歴代のガバナー名簿にはそうそうたるメンバーが並んでいる。

名前を挙げられた私はその場で狼狽し、『絶対に無理だ、できない。いやだ』そう叫び続けていた。とは言っても豊田ロータリークラブからガバナーを輩出することに異論はなく、その後、誰が適任なのかを仲間らと話し合ったりした。

ガバナー候補として私が思い浮かべたのは、立花正昭君、浦野正二氏、金田季三君の三名だ。このお三方ならクラブの代表として、また地区リーダーとして手腕を発揮されるに違いないと秘かにある先輩と相談していた。だが、残念ながらこのお三方は全員が諸事情でクラブを退会されることになり、話はまた、頓挫したかに見えた。

しかし、伊藤君と藤井君は、私の知らないところで話を少しずつ進めていたようだった。

出るのか、出ないのか？

「ガバナーノミニーには誰が適役なのか？」その会合後、しばらくこの話題を耳にすることはなかった。だが、ロータリーの仲間たちからは少しずつ情報が入ってくる。「齋藤君、名前が出ているようだが、本当に手を挙げるのか？」こう、直接電話でたずねられたこともあった。

「せっかくのこの機会、ぜひ豊田からガバナーを誕生させてください」こう言って応援してくれる後輩もいた。

しかし「齋藤さんが出るなら協力しない」と、はっきり言う人もいた。私では荷が重いだろうという訳だ。この言葉がどれほど悔しかったか知れない。そんな中でも、豊田ロータリークラブ会長時代に幹事をつとめてくれた杉浦弘高君は、豊田のためなんだから頑張りましょうと、私を力づけてくれた。

そして二〇〇四年の夏。私をガバナーとして推薦するための臨時総会が開かれ、全員一致で可決された。

覚悟をしていたつもりだったが、実際に可決されたときは再度、狼狽することになった。『僕にガバナーとしての仕事が、本当にできるんだろうか…』ガバナーは雲上の存在と思う私の心は乱れに乱れていた。

しかしここまで話が進んだ以上、それを今さら覆すことができないことも承知でき、総会が終わるころには開き直りにも似た気持ちになっていた。

ここまで来たなら、やってやろう

『ここまで来たのならやってみよう。ガバナーとして必要とされるものを身につけ、皆が尊敬できるガバナーに近づいてやろう。しかしガバナーにはどれほどの労力と能力が必要なんだろう。そしてどんな外交力やリーダーシップを備えればいいのか。ガバナーとしてやる以上は、全生活をガバナーとしての職務につぎ込もう。その意気込みがなければ、ガバナーという仕事がまっとうできないのではないか』

総会が終わるまでの短い時間の中、私はこう考えていた。そのとき、ふと思い出したのは、中学時代の恩師・桑原耕三先生の言葉だった。

「逆境に立ち向かうなら、きっと助けてくれる人が現れる。努力してみろ」

事あるごとに幾度となく思い出すこの言葉は、己の励ましとなっている。

ロータリーの地区ガバナーは、まずガバナーノミニーの推薦（指名）を地区で受けなければならない。その後、国際大会での決定を経て、一年間ガバナーエレクトとなる。そしてガバナーになるための準備を積み、その次の年度にガバナーになる。ノミニーからガバナー終了まで約三年間だ。

『自己研鑽し、ロータリーを学び、なんとか自分なりにガバナーをやりきってやろう』。推薦を受け、やりきる決意をしたその夜から、さっそく私は自分の活動をバックアップしてくれる陣営づくりに取りかかった。

幹事役に藤井伸三君、会計長には伊藤康司君、地区監事に渡辺祥二君、そして何年後かにはガバナーにもなれるであろう若手メンバーらに声をかけた。「豊田ロータリークラブのために協力してくれ」と頼み込むと彼らは快諾してくれた。

ガバナーノミニーが正式に決定すると、さまざまな方からお祝いの電話をいただいた。恩師でもある加納産婦人科病院長・加納泉先生（第二七六〇地区一九九一～

一九九二年度パストガバナー）からは、朝一番で「おめでとう」とのお言葉をいただいた。

しかし、ここからしばらく、辛い期間が続くことになった。その理由は、そう、私には田舎のちっぽけな一病院の理事長という肩書きしかなかったことだったろうか？人間として欠けるものが大であったことだろうか？

風当たりがきつくなるであろうと予測してはいたが、これほど『友人とは何だろう』『人間関係とは何なのだ？』と考えさせられた淋しい時期はなかった。

経済界の名士ではなく、業界のトップリーダーでもなく、ロータリーの地区委員会で活躍している男でもない私には、まず関係クラブへの挨拶を兼ね、〝顔見世〟に出向くのが手っ取り早いと考えた。私は親クラブである岡崎ロータリークラブを皮切りに、九月から十一月にかけ、さまざまなクラブの例会に参加した。しかし、あれほど肩肘張って受けたガバナーノミニーであるにもかかわらず、拍子抜けするようなことばかりだった。つまり、ほとんどノミニーとして紹介されないのだ。

本来なら紹介され、挨拶すべき場面で呼ばれずに、肩すかしされ寂しい思いもし

た。『地元を代表するリーダーの一人となりたい』と、狼狽しながらもノミニーを受諾した自らの決意は、空しく空廻りするばかりであった。その後も、数々の会合や親睦会で無視され、黙殺される屈辱に接し、現実の厳しさ、そして卑劣にして破廉恥な人間ドラマを味わうこととなった。

豊田RCの仲間たちとともに。豊田RCは2006年に45周年を迎えた。

リーダーに求められているものとは

確かに、私は田舎の小っぽけな私立病院の理事長でしかない。そんな私がガバナーになろうというのだから、驚く人がいてもおかしくはない。もし私に大企業の幹部クラスの肩書きがあれば、また違った処遇になっただろう。しかし、大企業の幹部であろうとなかろうと、ガバナーとしてどう尊敬され、慕われるか…。その評価こそが、リーダーの資質として求められているのではないかという考えに変わっていった。肩書きを跳ね返す何かをつくる努力をしなければならなかった。

ガバナーノミニーに推薦いただいてからというもの、しばらくは多少のひがみも加わって、辛くいやな出来事ばかりが続いていた。だが、七十近くになってこれだけやる気に燃えることができたことは幸せだと思う。

十二月、一宮北ロータリークラブの例会でガバナーノミニーとして壇上に立ち、挨拶をすることになった。このクラブ訪問で何より感じたのは、第二七六〇地区二〇〇三年～二〇〇四年度ガバナーを務められた豊島徳三氏の特別なオーラだった。

豊島氏は、財力も家柄も学歴も…と何拍子も揃った方だ。しかも、それに加えて特別な人間的魅力があった。例会中には、私自身を丁寧に紹介してくださり、あいさつの時間も頂戴できた。そこには人を思いやる心を感じずにはいられなかった。そしてクラブメンバーの多くが豊島氏を敬い大切に扱う態度に敬服した。

『この、人間力としてのオーラが僕には必要なのかもしれない』

この日の豊島氏の立居振舞いに感激するとともに、自分の存在感のなさを痛感することとなった。

GOVERENOR'S MONTHLY LETTER 二〇〇六～二〇〇七

月信に寄せた、ガバナーとしての想い

ガバナーの大きな仕事の一つに、『ガバナー月信』の発行がある。これには地区内の活動報告や出席報告、ロータリー全体の動きなどが記載されており、以前は地区内各クラブの会長に、毎月送られていたものが、今では地区内メンバー全員に送られるようになった。この冊子の冒頭に、私のロータリーへの想いを綴らせていただいた。今、読み

返すと『もっとこうすればよかった』『別の伝え方があったのではないか』と思う部分もあるが、ガバナーに就任した二〇〇六年七月から十四ヶ月間の想いがここには詰まっている。

二〇〇六～〇七年度　R1テーマと地区運営方針

■R1テーマ　『Lead the way　～率先しよう～』

■地区運営方針　『原点回帰』

原点回帰～その精神（こころ）を受け継ぎながら～

今、世界中のロータリークラブで内部崩壊が起こっていると言われていますが、元気のよいこの地区も例外ではありません。ここ数年で一割のメンバーがクラブから去っていきました。急ぎすぎる拡大と無理な増強のせいでしょうか？　ふくれあがるグローバルなプログラムのせいでしょうか？　ロータリーの第二世紀を歩みだした私達は、改め

て自分たちの足許をみつめ直して内部崩壊をくい止めなければなりません。過去を振り返ることは、未来への責任だと言われますが、私達はそのためにロータリー百年の歴史を学び、ロータリーの精神を、クラブ運営の原理原則を、改めて確認することが大切です。万博及びロータリー館は大成功に終わりました。また、ポリオ・プラスという人類愛の巨大プロジェクトは、いよいよ終焉を迎えようとしています。やっと、ロータリーの日常性がもどってきました。クラブ奉仕を軸にしたロータリー論を語る一年にしましょう。

またＲＩ会長テーマは『Ｌｅａｄ　ｔｈｅ　ｗａｙ　～率先しよう～』です。このテーマは家庭で、職場で、そして地域で貴方が何事にも〝率先しよう〟ということです。固定概念にとらわれることなく、自由に考え、そして奉仕の行動に移ることを提案しています。〝率先しよう〟を合言葉に次の事項を地区運営方針にしたいと考えます。

第二七六〇地区の二〇〇六～二〇〇七年度方針

一、クラブ奉仕に徹しよう。

～貴方は例会を楽しくするために何を心がけていますか？～

①例会を楽しむ演出を。（一〇〇％の出席率をめざし、途中退席をやめよう）

②ロータリー情報を活発に。

③広報活動の強化。

④仲間の五％増加をめざそう。

二、ロータリー財団・米山記念奨学会への協力。

～貴方は社会奉仕、国際奉仕に参加していますか？～

一人のロータリアンとして、一つのクラブとしては、その力は大きくありません。しかし、資金がまとまりますと人材育成に、街づくりにその力を発揮します。協力することは私達の誇りです。

三、ロータリーを学ぼう。

～貴方も、もう一度ロータリーの本を開いて下さい～

①ＩＭ（Ｉｎｔｅｒｃｉｔｙ・Ｍｅｅｔｉｎｇ）を成功させよう。

ＩＭは同一分区で行う勉強と親睦を深める会合として日本のロータリーでは定着し、継続されています。いわば、日本のロータリーの文化であり、伝統的財産でもあります。一時休会していたＩＭをまた始めましょう。そして、自己研鑽と友愛の輪を広げましょう。

②地区研修委員会・地区ロータリー情報委員会の新設。

地区リーダーシッププランに従って、明日のリーダーを育成するプログラムを考えましょう。

ガバナー就任にあたり

二〇〇六年七月一日発行　ガバナー月信より

今年の梅雨は例年になく男性的で激しく、昔のようにしっとりと雨が続くタイプでは

ないようです。さてこの七月より新しい年度が始まります。ガバナー月信はその生い立ちから考えてみますと、地区ガバナーがクラブ会長・幹事にあてた「親書的な公式文書」であり、例会の席上で会長がクラブメンバーに披露し、R－会長の細かい方針やガバナーの考え方を伝える書簡であります。

地区運営の基軸を「原点回帰」としましたので、出来る限りその立場に立ち、責務としての月信を書いていくつもりであります。さて「原点回帰」の原点とは、ロータリー百年の歴史の中で、ピンポイントとしての年代に限定して考えがちでありますが、歴史は途切れることなく流れ続けていることからも、むしろ年代ゾーンとして考えた方が適切と考えます。

そこでポール・ハリスが第一回の会合を開いた時（一九〇五年二月二十三日）から一九二三年セントルイス大会にて、かのあまりにも有名な二十三～三十四決議がなされ、引き続いて四大奉仕が決まった一九二七年までのおよそ二十年間余をロータリーの原点と考えてはどうかということであります。即ちロータリーの思想が形成された期間であります。

この時代に立ち返って今のロータリーを見つめ直すことは、ロータリー原理主義とか、〝内向するロータリー〟とか云われそうでありますが、それは違います。今のロータリーを見つめる時に、ロータリーがロータリーの原理原則を当たり前のものとして運営されていないことを、まま見かけるものですから、当たり前にしましょうと申し上げているだけであります。出席が厳しすぎるから入会希望者が少ない、退会者が増えるとの考えから、欠席補填期間を欠席例会日の前後二週間にして、出席を保障し会員増強推進策としました。結果はどうでしたか？　結局、出席率は低下したと言われているようです。メイクアップに駆けつけ六〇％ルールに守られ三十六分間列席して、卓話者の前から当然の権利のような顔をして胸を張って途中退席する事態が発生し、クラブ会長が卓話者に顔を赤らめて謝罪する光景が日常茶飯事に見られます。私は出席率を上げるためのメイクアップ、自己の出席義務維持のメイクアップをとやかく言うつもりはありません。メイクアップに行ったら、そのクラブの例会の雰囲気を壊す途中退席は自分の品位と相手クラブへの思いやりを汚す行為だと思います。多分、初期ロータリークラブの例会は〝我選ばれし者〟としての自覚も高く、こんなお行儀の悪いことは無かったのでは

ないかと考えます。その頃はすでに会員間の互恵主義を脱し、企業倫理を守り、職業奉仕に全力を傾けながら、奉仕を地域社会に国際社会にと拡げていったようであります。当時はメンバーとしてクラブ奉仕に徹する、即ちクラブ運営のために協力する、共働して楽しくする演出が思いやりとして醸し出されていたと考えられます。ロータリーソングや親睦例会の誕生は、まさにそれであります。

例会は自分が主人公として、あるいはピエロとして演じれば楽しいものです。ロータリー情報を友人やクラブ会長からどんどん吸い上げれば、例会に出席しないと損だと気づきます。

自分が出席しない事は、あなた自身から発信される情報が無いために、出席したメンバーは損害を被るわけです。結果としてクラブ奉仕と職業奉仕を同時にあなたは放棄していることになるのです。

クラブの例会が楽しくなってくると各種のプログラムが生き生きとしたアイデアで運営され、クラブは「俺のクラブ」となってくると思います。「俺のクラブ」は人様の為に地域内外で何かやれないだろうかという発露となります。

人様のために企画されたプログラムは正しければ成果を上げ、メンバーの達成感と地域での高い評価となり、ロータリーの公共イメージを拡げてくれます。公共イメージの向上のためのプログラムとは、自分が、そしてたまにはクラブが人様のために少しは役立つことを実践することです。

しかしながら、ロータリークラブが催す行事は、どういうわけか不思議とマスコミに取り上げられることが少なく、ロータリークラブの存在があまり世間に知られません。非常に残念なことであります。今年度はこの事を考える一年にしたいと思っています。

ロータリーのイメージ向上は会員増強へつながります。少し時間はかかりますが、意識的に広報活動に取り組む必要がありそうです。

今日から新しい年度が始まります。新会長・幹事さんの元にクラブ一丸となって楽しいロータリーライフを送る努力をして下さい。公式訪問の時にお会いできる事を楽しみにしています。

楽しさあってこそのロータリー

二〇〇六年八月一日発行　ガバナー月信より

梅雨の雨の降り方はスコール並みに変化して、老いの身には辛い猛暑となりました。各クラブ会長・幹事の皆様は、順調に新年度のスタートを切られたものとお慶び申し上げます。

さて私の同期のガバナーに第二八三〇地区（青森）の鐘ヶ江義光さんが居られます。ロータリーにかける思いと行動力は、とても私の及ばぬところであります。

〝出会いと参加〟を旗印に掲げて、出席率向上を目指して精力的な活動計画を立てておられる。

「第二七六〇地区の出席が良いのは何故？〝何か方策でもあるの〟」と問われ、挙句の果てに「その辺りのことを話してくれ」と言われ第二八三〇地区の地区協議会で七十分の講演をすることになりました。確かに第二七六〇地区の出席率は九五％。これを前後五十年間もの長さに渡って維持している。これは律儀でいかにも保守的な愛知県人の気

質なのかもしれない。

この出席率がじりじりと低下して九〇％を切り、限りなく八十％へ近づく地区ガバナーやクラブ会長にとっては、自分だけの責任ではないとはいえ、地区・クラブ運営の評価表を突きつけられているようで辛いと思う。

試みに日本のロータリークラブ（地区）の出席率の推移の記録を紐解いてみようと、『友』からそのデータを引用させてもらった。一九五六年第六〇地区（東京以北の北日本）十一月出席率の平均は九二・二％であり、青森（五十人…九四・六％）、弘前（三十五人…九一・四％）、東京（二百六十人…八一％）となっている。

同年第六二地区（北日本を除く地区）十一月出席率は平均九一・二七％、岡崎（三十四人…一〇〇％）、名古屋西（五十一人…九八・四三％）、豊橋（四十九人…九六・六六％）と記録されている。第二七六〇地区は五十年前より高出席率であり、これを維持しているから〝すごい〟の一言に尽きる。

メンバー数と出席率とを比較すると東京ロータリークラブは毎例会平均五十人近くが欠席している事になる。それに比して地方都市の出席率の高さが目に付く。

ここでは述べないが、北海道内の都市のロータリークラブの出席率の高さは他を圧倒するものが記録されている。

ロータリー運動は地方の街づくり、人づくりという要素を内包しながら一九六〇年～七〇年～八〇年と経過するにつれ拡大と増強を繰り返し、組織が肥大化していくのだが、地方都市であるが故に壁に立ちふさがれてしまったのだろうか、「続・農村小都市クラブの問題点」（鹿児島西：鮫島志芽太『友』一九七三年三月）、「東北ロータリーの問題点」（三沢：黒田政文『友』一九七三年三月）などすぐれた分析論文が生まれ、ロータリー運動の発展に苦悩される姿に共感を呼ぶ。

出席率はクラブ数が多くなるにつれて、クラブ別から地区別にまとめられるようになり、今や死語となった「出席競争」（日本は参加しなかった）が地区ガバナーに無言の圧力となったと想像される。それは日本全地区が出席率九五％前後という驚異的な数字を約十年近くの期間維持していたのを見ても解る。

しかし一九八七年の十万人会員突破を境にゆっくり下降し始め、一九九六年六月の十二万九千九百九人のメンバー数をピークに出席率九〇％割れの地区が続出し始めた。

メンバーは減少してもクラブ数は増加するという奇妙な現象が目に付くようになり、各地区のガバナーが必死になって支持基盤を保持しようとした努力が見られて頭が下がる。

ところで何故我が第二七六〇地区は高出席率が維持されているのだろうか？

地区としてのシステマティックな教育プログラムがあるわけでないのに。今年の四月に当地区パストガバナー・元地区幹事の皆様にアンケートを出してその理由をお尋ねした。皆様が等しく述べられたことが「出席の意義を十分理解し伝統となり、今日までその精神が受け継がれている。それは新人教育でなされるものだ」とありました。先輩たちがやかましく「出席」を説いた業績とも考えられます。

しかし、そればかりではないでしょう。例えば企業環境、天候、地理的条件、更には…皆様各々でお考え下さい。

出席率第一位の地区ガバナーとしてロータリアンとして、これほど誇りに思うものはありません。高橋直前ガバナーの「ロータリーは楽しければよい」ものであり、だからこそ例会へ足が、顔が向くのだと思う。〝我がクラブ〟がそこにあるわけだが、そのクラブが頂戴した物は、縁あって外なる奉仕活動へ昇華しているのだろうか？

出席率の高さと奉仕活動のエネルギーと正比例するのがロータリー活動と考えるから、我が友、鐘ヶ江ガバナーは、表現を変えて「出会いと参加」をテーマにして努力しているのだと思う。出席率一位の第二七六〇地区のクラブの優秀さは、世界第一位と考えるがどうだろう。

出席率第一位はこの地区の伝統と会員の努力で培われてきたものだから他地区へ譲るわけにはいかない。

職業奉仕の指針「ロータリー職業倫理訓」

二〇〇六年九月一日発行　ガバナー月信より

残暑お見舞申し上げます。

新年度も二ヶ月経ちましたがお変わりございませんか。

クラブ計画書を拝見させていただいておりますと各クラブ会長さんの「意気軒昂や高し」が感じられ嬉しいかぎりです。

公式訪問に訪れたあるクラブの計画書の中に嬉しい発見がありました。そこには「職

業宣言」が記載されていたからです。「職業宣言」は、久しぶりに読ませてもらいました。残念ながらこの宣言文の存在はゆっくりとしかも確実に忘れ去られようとしています。しかし、もっとみじめな目に遭っているのが「ロータリー職業倫理訓」（道徳律）ではないでしょうか。一九九〇年代の前半までは、この二つの名文は職業奉仕の金科玉条の扱いを受け、先輩諸氏から読むことをすすめられもしました。しかし、もしかしたら日本の地区から忘れ去られようとしています。奇しくもロータリーの第二世紀を歩みだした今、皮肉なことにロータリーの生誕期のような企業倫理や職業道徳の乱れが多発している現状を見るにつけて、再びこの二つの名文に登場を願うものであります。

そこで、今日はほとんど忘れられた「ロータリーの職業倫理訓」をご紹介させていただきます。

「四つのテスト」と共に、多くのロータリアンの座右の銘として親しまれてきた職業奉仕の指針でありますが、その内容の厳しさにある時はボイコットされ、またある時には復活するという数奇な運命をたどった文章のようです。とかく利潤を追い求めすぎる風潮を戒めて、いかにして職業道徳を保ち職業倫理を高めるかの心構えがまとめられてい

ます。

元来は、アイオワ州シュー・シティ・ロータリークラブの職業奉仕委員会のメンバーが二年がかりで作成し（一九二五年）、後にその版権がRIに寄贈されたものであります。

ロータリーの職業倫理訓（道徳律）

一．自分の職業に価値を認め、これにより自分は社会に奉仕すべき好個の機会を与えられたと考えるべきこと。

二．自分の身を修め、自分の実力を涵養（かんよう）し、自分の奉仕を広めるべきこと。ならびに、それを通じて奉仕に徹する者に最大の利益ありとするロータリーの基本原則を実践すべきこと。

三．自分は企業経営者であり、したがって成功の野心を抱いていることを自覚すべきこと。だが、自分は道徳を重んじる人間であり、最高の正義と道徳に基づかざる成功はこれを欲するものではないことを自覚するべきこと。

四．自分の商品、自分の労働、自分のアイディアを金銭と交換することは全当事者がこれによって利益を受ける限りにおいてのみ、適法にして道徳にかなうものであるとの信念をもつべきこと。

五．自分の従事する職業の水準を向上させるための最大の努力をはらい、かくして、自分の従事する職業の処理の仕方は賢明であって、利益を産み、この実例にならえば幸福の道が開けることを同業の者に知らしむべきこと。

六．同業者と同等ないしそれに優る完全なサービスを尽くすような方法をもって企業経営を行うべきこと。また、もし完全なサービスか否かに疑念の生ずる場合には、当該債務上妥当な範囲を越えてもサービスを行なうべきこと。

七．専門職業にたずさわる者、または企業経営者の最大の資産の一つは、その友人であることを理解すべきこと。

八．利益のためにみだりに友人の信頼を利用することは、ロータリーの精神と相容れない。

九．社会秩序の立場から、他人が絶対に認めないような不正な方法によって機会を利用し、これによって得た人の成功を正当または論理的なものと考えてはならないこと。

十．友だちに対して義務を負うと同じように、社会一般の人たちに対してもロータリアンは義務を負うべきこと。

十一．すべての人にしてもらいたいと欲することを人に行なうべし。

以上ロータリー職業倫理訓は、とかく目先の金銭を目標にする利益優先型の経営方

針に、精神的・倫理的な枠をはめると共に自分の職業に価値を認めて同業者の中にロータリーの理念を広げること、営利行為の根底に友情を置くこと、また友情は非営利的信頼関係であることが謳われています。

ロータリーの倫理訓であると同時に日常生活や経営活動のモラルでもあり、「四つのテスト」と共に職業奉仕の指針ともいえます。

なお、本文中の「友だち」を「ロータリアン」に置き換えることによって、ロータリアン同志の取引関係にも釘を刺しロータリーの親睦を利便や利益を得る手段として利用することを戒めていることに気付いていただきたいものです。

良い商品づくり、これこそ「職業奉仕」

二〇〇六年十月一日発行　ガバナー月信より

十月に入り、さすがに秋の気配が強く漂うようになりました。いかがお過ごしでしょうか。秋の訪れとともに各地の地区大会のプログラムが届けられ、胸躍る心地でいっぱいです。その案内の一つにシェルドン博士の六文字の名言〝He profits m

ｏｓｔ　ｗｈｏ　ｓｅｒｖｅｓ　ｂｅｓｔ〟をパネルディスカッションのテーマにする地区があります。

この名言はロータリー第二標語ですが第一標語として認知された時代があったようです。またＨｅがＯｎｅやＴｈｅｙに置き換えられたりして、いじりまわされた前歴があります。

十月は職業奉仕月間です。「売り手よし、買い手よし、世間よし」という言葉がありますがこの言葉はロータリーが生まれる以前から、日本の近江商人の心意気として語られたと聞いています。まさに職業奉仕の神髄を見る言葉ではないでしょうか。お互いに商売上の倫理を守り、取引を末永く続けましょうという、あうんの信用を築き上げる精神が見てとれます。

ロータリークラブが生まれ「親睦」「相互扶助」という初期活動を見つめていたアーサー・シェルドンは「相互扶助」から発生する模大な利益・恩恵を受けるロータリアン間の流通システムの中にある精神を相手方のために考えようとする「奉仕の概念」と断定しました。

そして、このロータリーの思想を日常実践の場において企業経営者の心に訴えるような形で表現したらどうなるかを熟考し、遂にミネアポリスの床屋の中でこれを得たといいます。「曰く奉仕に徹する者に最大の利益あり～He profits most who serves best.」と。

このシェルドンの標語が発表されたのは一九一一年の第二回全米ロータリー連合会のポートランド大会においてであります。シェルドンはこの会議に自ら出席することができなかったので、シカゴ・ロータリアンにメッセージを託し、これが大会で読み上げられたようです。

「経営の科学とは奉仕の科学のことを言う。すなわち、『奉仕に徹する者に最大の利益あり』」と報告されました。

「一瞬会場は水を打ったように静まり返り、次の瞬間に万雷の拍手が起こり、大会決議委員長ポートランド・クラブ会員ジェイムズ・E・ピンカム（James E Pinkham）はこれをロータリー宣言の最後に加えるべきことを提案した。かくしてこの標語はロータリーの世界に君臨し始めたのである。」小堀憲助著（『ロータリアン発生史』

四二～四三頁）とされています。

ところで職業奉仕の概念は今どうなっているのでしょうか？「ロータリー運動の柱でしょう？」「結局、商売に精出せってことさ！」と短い言葉で引き継がれています。一九七一年プラハ合意によって円高を迫られた物づくり立国日本の製造システムの効率化とミクロ単位にまで精度を求めた部品の技術革新は、世界中にメイドインジャパン製品をあふれさせました。しかしその過程の中で職業奉仕の心は精度の高い、良い商品作りの中へ埋もれていってしまったように思えて仕方ありません。しかし、実はこの良い商品作りの行為こそ職業奉仕そのものだと再確認し、自信を持ってそれを主張したいものです。

エピソード 1

恩師との出会い。「キミは全然努力しないじゃないか」

人生にはさまざまな出会いがあるが、その中でも学校の恩師との出会いは、その後

の人生に大きく影響してくるとよく言われている。

私の場合、長野県・中野市で過ごした中学時代の恩師、桑原耕三先生との出会いは、掛け替えのない財産となっている。「逆境に立ったときほど、おまえは強くなれる」こう言って励ましてくれたことは今も忘れることができない。先生はいつも平等に生徒に接し、決して高慢なところを見せなかった。生徒が書いた日記に毎日目を通し、そこに具体的な感想や指導を書き入れてくれる。そんな先生だっただけにほかの生徒からも非常に人気が高く、いつの間にか先生を慕う〝桑原組〟が出来上がっていた。

私は中学生のときに父の会社が倒産し、急に家が貧しくなったという経験がある。そのとき陰でこっそりと支えてくれたのも、桑原先生だった。先生の自宅のリンゴ畑の掃除を手伝わされたことがあるが、それは僕にバイト料をくれるための口実だった。

勉強面では「お前は全く勉強しない、努力しない」と言い続けられたが、先生の勧めで、先生の母校である須坂西高校へ進学することができた。「成功すると信じて努力しなくちゃ駄目だ」と言われたことも心に残っている。

進学した須坂西高校で出会ったのが坂本先生だ。私は「名古屋大学に行きたい」と先生に相談したが、その答えは「今のお前じゃ無理だ。もっと努力しなければ行けない」だった。

その後、私は父の転勤で愛知県に移り住むことになり、半田高校へ転校。そのときの担任、渡辺先生に名大への進学希望を話すと、またもや「お前は数学ができないから名大は無理だ。全然努力しないじゃないか」と言われてしまった。

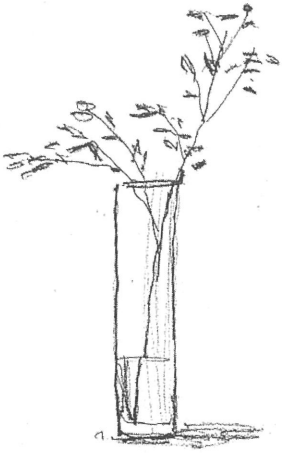
どうやら、私は何も言われなければ努力を全くしない生徒だが、駄目だと言われるとそれをバネに頑張ろうとする生徒だと、先生方に見透かされていたようだ。

恩師の叱咤激励のお蔭で、私は名古屋大学に無事合格。ここで、医学というものの考え方を教えてくださったのが、病理学の教授・田内久先生だった。

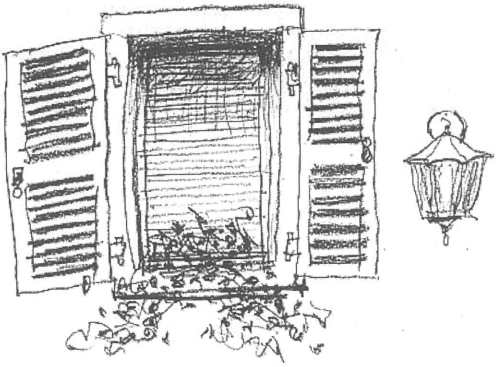
授業中、ホルマリン漬けの肺の標本を見ていたときのこと。突然、教授から「この肺の病気は何だと思う、齋藤君、答えてみろ」と指名された。実際に解剖し顕微鏡で見た訳でもなく、判定がつかない。だが考えた末、私は「肺がんではないか」と答えた。ほかの友人は「それはおかしい、病理標本を見てもいないのにわからないじゃな

いか」と口々に言う。だが、教授の答えは「齋藤君の考え方が正解」だった。一番、確立の高い病気から順に考えるのが医学の基礎だよ、というのが教授の教えだった。そんな教え方や、ものの見方、何より先生の教授らしからぬ優しさ、穏やかさが好きだった。その後、田内久先生には、私たち夫婦の仲人をお願いすることになった。

ところで、中学時代の恩師・桑原先生は今から十年前にお亡くなりになったが、今も先生の墓前で手を合わせる〝桑原詣で〟は、毎年欠かしていない。一人娘の泉ちゃんは声楽家であり、今でも活躍中だ。



中学校時代の恩師・桑原耕三先生(右)と。昭和38年、結婚報告に伺ったときに。



第二章

原点回帰のはじまり

ガバナーエレクト本格始動に向けて

二〇〇五年がスタートした。ガバナーエレクトとしての実動は七月からとなるが、新年早々にバタバタと下準備が始まった。正式なガバナーになるまでには時間があるように見えるが、この時期から準備しなければならないことは意外と多い。

「ＰＥＴＳ」「地区協議会」「地区大会」そして、「公式訪問」の日程決めと講師の依頼。会場も押さえなくてはならない。そして何より大切なのが、私をサポートしてくれる地区副幹事の人選だ。この地区副幹事は同じ豊田ロータリークラブのメンバーにお願いすることになる。ガバナーノミニーに選出されたときから地区幹事をお願いしている藤井伸三君らとも相談し、天野勝美君、梅村正明君、秋田敬治君、鈴木元弘君、河木照雄君、松井勇君、木下圭一君、酒井法丈君の八名に地区副幹事をお願いすることになった。地区会計長には伊藤康司君、地区監事には渡辺祥二君。それぞれ本業も忙しい中での快諾に、私は今でも深く感謝している。生涯の借りがあると思っている。ただし、その借りは「お返しできない」借りである。

こうしてガバナーへの下準備は着々と進み始め、〝齋藤年度〟の形が少しずつ見えてきた。そしてこっそり、タンスの中のへそくりをガバナーエレクト事務所運営のために用意した。（クラブからの資金援助はなくてもやれることは計算ずみ）

四月のはじめ、ガバナーエレクト事務所がついに開設された。場所は私が理事長を務める旧斉藤病院の空き部屋の一室（九十九㎡）別個に台所とトイレ付き。机、電話、ファクス。なんとか体裁を整える程度の小さな事務所ではあったが、ここが拠点となると思うと身も心も引き締まる。そして、四月十九日、第一回目の事務所運営スタッフ会議が開催された。方向性や各自スタッフの役割を決定する重要な会議だ。チームとしての志気を高めるためにも、第一回目の会議は成功させたかった。

そこでアドバイザーをお願いしたのが、伊藤宏君、藤田澈君（大須ＲＣ）の両君だ。このお二人は、私が豊田ロータリークラブ会長時代の第二七六〇地区ガバナー・岡部快圓君を脇で支えたロータリー通だ。

その経験をふまえ、どう組織を盛り上げ、うまくまとめていくかをご説明いただいた。ガバナー事務所はどう運営したらよいのか。お互いの役割分担はどうするのか。打ち出したガバナーの方針をどう地区の中へ反映していくのか。また、ガバナー年度

に二七六〇地区の分区から選ばれる八名のガバナー補佐をどうサポートしていくのか。さまざまな局面で起こる問題にどう対処していけばよいのか…。複雑な人間関係の中で、組織を盛り上げ、まとめていくのは並大抵ではないことは十分わかっているつもりだったが、新たな組織を立ち上げる難しさを改めて感じることとなった。

この会議の際、伊藤君、藤田君にお持ちいただいたさまざまな資料は、後々の活動に大いに役立ち大変感謝している。

この後、第二回、第三回と会議を重ねるにつれ、志気はますます高まり、皆の気持ちに火がついたようだった。新たな組織が徐々に形を表し、それが具体的に進み出した。

余談だが、二〇〇四～二〇〇五年度のガバナー・大島宏彦君のガバナー事務所からいただいたパソコンは、齋藤年度のガバナー事務所でも大活躍した。このパソコンには、大島ガバナーの年間スケジュールのほか、安藤重良君が地区幹事としてどう動かれたかなどの記録も残されており、蓄積された財産として我が事務所で大切に使わせていただいた。この紙面を借りて再度お礼を申し上げたい。

〝齋藤年度〟への目標を掲げて

会議を重ねるにつれて、スタッフの気持ちは一つにまとまっていった。特に第三回目の会議では、自らの熱い想いを初めて皆にきちんと伝えることができたように思う。幹事、副幹事らスタッフ各自の仕事分担もより具体化され、明確になってきた。

国際的な組織として動くロータリークラブは、それぞれの立場ごとに仕事が細分化されている。その中でガバナーとしての役目をこなすのはもちろんだが、せっかく引き受けたからにはちょっぴりルール違反だが〝齋藤らしい〟独自のカラーも出したかった。それには、ガバナーエレクト年度からの綿密な準備が必要だった。

ガバナーエレクト事務所として最大の任務となるのは大まかに三つ。

一、「地区協議会」と「地区大会」の準備。二、「ガバナー月信」の発行準備。三、地区内各クラブの公式訪問だ。

一の「地区協議会」は、当該年度のロータリークラブを率先するリーダーの情報の共有化のために重要なポイントになる。二の「ガバナー月信」はガバナー年度に入っ

てから計十四回に亘り発行される。この月信には会合・会議の開催報告など重要伝達事項が記載されるだけでなく、その月ごとの〝ガバナーの想い〟を載せていく。RI会長テーマに反しないよう、その方針を各クラブ会長に伝える大切な作業である。

そして三つ目の地区内各クラブの公式訪問は、ロータリーの年度テーマを深慮しつつ、ロータリアンの意欲を高めるために大きな役割を持っている。第二七六〇地区の会員数は約五千二百人。八つの分区にわかれ、その下に八十一のクラブが存在する規模を持つ。ガバナーの公式訪問の日程に合わせ、ガバナー補佐訪問、地区委員会の日程が決まるので、特にこのスケジュール調整は急務だった。この公式訪問は各クラブ毎に訪問するのが元来の姿だが、DLPの導入によって、二つ三つのクラブをまとめて合同で行うというスタイルに変化してしまった。これはとても残念なことだ。

良きロータリー文化を後に継承するために

この三つの任務に加え、齋藤年度に着手したい幾つかの事柄についても、三回目の会議でスタッフに伝えた。

そのうちの一つが「ＩＭ（インターシティミーティング）」の完全復活だ。分区ごとにテーマを決め、勉強・討論・発表の機会をもつＩＭは、自己研鑽のためにも、クラブ力向上のためにも効果的な役割を果たしていた。しかし、第二七六〇地区は『愛・地球博』の関連事業が続いたため、昨年度は、八分区のうち四分区でしかＩＭが開催されていない状況だった。確かに万博開催で忙しい時期はあったが、せっかくのロータリー学習と分区内親睦の機能を自然消滅させてしまうことは、いかにも惜しいと思えた。

もう一つは「クラブ奉仕委員長会議」の強化だ。ロータリアンが次第に高齢化してきていることもあり、新しいことを学ぼうという姿勢が少なくなってきている。そんな状況を打開し、以前のように〝もっと勉強しよう〟〝自己研鑽しよう〟という気持ちを広く伝えたいというのがその理由だ。

これ以外にも地区の各種委員会がどんな活動を展開していたかを学び、それをどう引き継ぐかを検討する必要もあった。

当時のガバナー事務所運営会議レジュメを見ると、その燃えるような思いを読み取ることができる。ここまで情熱を燃やすことができたのは、自分自身でも嬉しい思い

出の一つとなっている。

「ＩＭ」の復活について考えていた私は、日本全国三十四地区のガバナーにアンケートをお願いした。

質問は「次年度、あなたの地区では、ＩＭを引き続き開催されますか」というもの。これにはほとんどの地区から「もちろん」という強い意志をもった回答が送られてきた。しかも、中には「今年も第二七六〇地区はＩＭ開催をうやむやにするつもりなのか」「こんなアンケートをとって、ＩＭ開催をやめようというつもりなのか」というお叱りの文章が入ったものもあった。その文面を見て、地区ごとのガバナーがいかに熱い想いでＩＭを日本ロータリーの文化として継承し定着してきたかを強く感じ、当地区のＩＭを、何がなんでも完全復活させたいという気持ちをさらに強く持った。

二〇〇五年七月。ガバナーエレクト年度がスタート

何度かの事務所運営会議を重ね、いよいよ正式にガバナーエレクトとなる七月を迎

えた。年度スタートを目の前にした六月末、老舗料亭・八勝館で地区財団奨学委員会の打ち上げ会が行われた。これはロータリー財団委員長・石田正城君のお声がけによるもので、その宴席上、私のガバナーエレクトの励ましと嬉しいお褒めの言葉をいただいた。

同じ六月末、名古屋葵ロータリークラブではチャーターナイトが行われ、それにも参加した。同クラブは、若いロータリアンを中心にした新進気鋭のクラブだけに、ほかのクラブとは違う活気を感じることができた。

七月に入ると、さっそくガバナー会議が東京で開催された。新年度のガバナーエレクトが初めて一堂に会する顔合わせだ。新ガバナーやパストガバナーが多く集まる研修会だけに気持ちも高揚する。この会場この場面に、自分がいることが実感できなかった。

その席上、紋別港ロータリークラブのパストガバナー田巻明男氏から大村北ロータリークラブのパストガバナー・佐古亮尊氏をご紹介いただいた。佐古氏は『ロータリーの森を歩く』という本も出版されている素晴らしいロータリーリーダーのお一人で、有名な方だ。このほか伊丹ロータリークラブのパストガバナー深川純一氏など、

数々の先輩もご紹介いただき、これまで雲の上の人でしかなかった方々を身近に感じることができ感激したことを覚えている。

名古屋に戻るとすぐに第四回目のガバナー事務所運営会議が開催された。東京での感動を伝えると、〝がんばろうぜ〟という空気が会議にはあふれ、本当に嬉しかった。

出会いの中に大きなヒントが

七月も半ばになると、次期ガバナー補佐の選出をしなくてはならない。第二七六〇地区の八つの分区からそれぞれガバナー補佐の推薦者を出すのだが、それをガバナーの名古屋西ロータリークラブ・高橋治朗氏にお願いした。ガバナー補佐は、ガバナーに代わって分区をまとめる主要な責務があり、ガバナーの片腕なのだ。そのため、任期中に少なくとも三回各クラブを訪問するのが望ましいとされているが…。

そして翌八月、私は長崎県大村市の大村北ロータリークラブのパストガバナー・佐古亮尊氏を家内と共に表敬訪問した。この訪問には齋藤年度の地区大会で基調講演をお願いしたいという目的があった。前述したが、佐古氏は『ロータリーの森を歩く』

という本を出版されている。これは大村北ロータリークラブ三十周年を記念して出版されたもので、三十年の節目を機にロータリーの原点を振り返りつつ、ロータリーの誕生、発展の歴史、奉仕哲学、綱領、組織管理原則などをまとめたものだ。私は地区運営を、ロータリーの基本に徹したものにしたいと考えていたこともあり、ロータリーの原点を著された佐古氏こそ基調講演者に相応しい先輩と考えた。私の想いが伝わったのか、佐古氏は講演依頼を快く引き受けてくださり、私の心の荷が一つ下りた。

ところで、佐古氏は日蓮宗の萬歳山・本経寺の住職をされている。表敬訪問ではお参りもさせていただいたが、そのとき目にとまったのが玄関口の土間に掲げられた大きな「回首原点」の文字だった。それは、佐古氏がガバナー時代に運営方針とされていたお言葉だとか。私は「首を回し、原点を見つめ直す」と解釈したが、その四文字に深く感動し、年度の地区運営方針の大きなヒントをいただいた。

広い境内と隣接する墓地もご案内いただくと、そこには度肝を抜くような3m長はあろうかという大きな石碑・石塔がいくつもあった。さすが、肥前大村藩藩主の菩提寺だ。だが、佐古氏の説明によれば石碑の中には十字架が隠されているものもあり、眺める角度によって十字架を見ることができると言う。

基調講演、運営方針のヒント、そして長崎大村藩の歴史…。この表敬訪問は私にとって実りの多いものとなった。

「原点回帰」。すべて一から、見直して

やる気に満ちた夏ではあったが、やる気が出れば出るほど徐々に私は焦りを覚え始めていた。やらなければならないこと、挑戦したいことはいくらでもあるのに、スケジュールと時間に追われる日々が続く。

そんな時、ふと、ある語句が頭に思い浮かんだ。「原点回帰」……。

しばらくの間決めかねていた、今年度の地区運営方針のフレーズにこれはぴったりではないか。長崎の佐古氏を訪ねた折りに見せていただいた「回首原点」という文字が頭に残り、それがヒントになった。「原点回帰」このフレーズにはロータリー精神はもちろんのこと、組織運営などすべてを原点に返り見つめ直す、という意味を含めることができる。書いては消し、消しては書き、思い悩んだフレーズはこれでまとまる、そう直感した。よし、今年度の運営方針は「原点回帰」でいこう。

この決定は、焦る日々が続く私の心に落ち着きを取り戻してくれた。佐古亮尊氏を訪ねたお陰でこのフレーズを思い浮かべることができ、改めて佐古氏に感謝することとなった。

八月を過ぎ、ようやく次期ガバナー補佐となる八名が決定。ガバナーエレクトとしての本格的な初仕事として、次期ガバナー補佐の方々とお目にかかった。挨拶と同時に、地区の各種委員会担当と地区協議会の役割分担もお願いした。さらに今年度で復活を目指すＩＭへの想いもお話しした。各分区ごとに実行委員会を立ち上げ、テーマを決定するＩＭはガバナー補佐に主導していただかなければ成功しない。すべてのガバナー補佐さんにＩＭの復活は、「待ってました」と大賛成を頂戴した。

次期ガバナー補佐に挨拶回りをする私を見て「ガバナー補佐から来てもらうのが筋ではないか。どうして自分から動くのだ」という一部のご意見もいただいたが、私は『私の右腕となって働いてくださる八名には、こちらから挨拶に伺うのが礼儀だ』という思いがあり、挨拶に伺うと同時に地区運営についての思いを伝え、ご理解を頂きたかった。中には「どうしても私の方が挨拶に伺う」と仰る方もいて恐縮したが、どうにか八名の皆さんと顔を合わせることができた。

ここで齋藤年度のガバナー補佐の皆さんを紹介させていただく。

南尾張分区・森島昭二君（半田南ＲＣ）、西尾張分区・山内登君（尾西ＲＣ）、東尾張分区・江崎柳節君（小牧ＲＣ・〇七～〇八年度ガバナー）、西名古屋分区・片山主水君（名古屋東南ＲＣ・〇八～〇九年度ガバナー）、東名古屋分区・千田毅君（名古屋東ＲＣ）、東三河分区・尾原脩君（田原パシフィックＲＣ）、西三河分区・加藤鈴幸君（豊田西ＲＣ）、西三河分区・羽田育哉君（刈谷ＲＣ）。この八名の皆さんが、一年半に渡り私の右腕となり動いてくださった。私の無理な要望にも応えていただき、深く感謝している。後にこの八名の方々と同期会を開催することになるとは思いもしなかった。

皆さんへの挨拶が終わり、十一月、十二月の二度、次期ガバナー補佐研修会議が開催された。特に一回目の会議は豊田市鞍ケ池公園のトヨタ迎賓館で開催した。この館は数ヶ月前にＧＭのトップとトヨタ自動車との会談が秘かに開かれたと噂されていた。参加者が四十名を超え、大変緊張するものとなったが、パストガバナーの岡部氏がサポートしてくださり、どうにか無事に乗り越えることができた。

このほか「地区研修委員会」「ロータリー情報委員会」や「指導者育成セミナー」

などを新設するための計画も同時進行し、ガバナーエレクト事務所はますます多忙をきわめた。そして、まもなく目まぐるしかった二〇〇五年も、終わろうとしていた。

ガバナー月信
GOVERNOR'S
MONTHLY LETTER 2006→2007
No.10
ROTARY INTERNATIONAL DISTRICT 2760
2007年 4月1日発行
4月は、雑誌月間です。
4月
「桜」

「原点回帰」この言葉は、佐古亮尊氏との出会いが生んだ。

人間の巡り合わせとは

年が明け、二〇〇六年。この年は私にとってショックな出来事でスタートした。一月七日、娘の緑が嫁いだ、坂巻暁氏のお父上・坂巻皓氏が突然、逝去されたのだ。しかもそのとき、娘夫婦の間には四ヶ月の子どもができていたのだが、お父上はその事実を知ることなく、亡くなられたというのだ。

皓氏は千葉大学を経て、同大学整形外科で腰椎椎間板ヘルニアの手術を開発された。その後、鹿島労災病院長を長く務められていた。聞くところによると先生は、当日少々気持ちが悪いと言って自室に入られ、その後、奥様が見に行かれたとき、すでに事切れていたという。男として良い亡くなり方だと思うし、私もそのような最後がいいとも思ったが、暁、緑夫婦の間の妊娠の事実を伝えられなかった悔しさは今も残る。お通夜に向かう汽車の中で、私は泣いた。一人の人間が旅立ち、そしてその人間のＤＮＡが引き継がれた子どもが生まれてくる。この、人間の不思議な巡り合わせを感じながら私は千葉に向かった。

一月二十一日、高橋ガバナー年度の第四回・諮問委員会が開催された。この会で、次年度のすべての事業計画と予算を提出し、承認を受けなければならない。新設する「研修委員会」を、どのような組織にするかと随分悩んだが、さしあたり、ガバナー補佐の八名の方々にお願いすることにした。「ロータリー情報委員会」の新設、「地区指導者育成セミナー」の開催も承認されることになった。これで、私の年度の組織の骨子がしっかりとした姿・形となった。

国際協議会で見たもの、見えたもの

二月十五日、私は家内とともに中部国際空港を飛び立った。成田空港経由で赴いたのはアメリカのサンディエゴ。同地で開催される国際協議会に参加するためのものだった。日本からも、三十四名のガバナー予定者が参加する。帰国後は、できるだけ早くこの協議会の情報をガバナーと次期ガバナー補佐らに伝達しなければならない。

成田空港でほかの地区のガバナーエレクトとも合流し、サンディエゴへ。そこから宿泊先のマンチェスター・グランドハイアット・サンディエゴホテルへと向かった。

我々の乗った観光バスがホテルに到着すると、重田ＲＩ理事、南園ＲＩ理事、渡辺ＲＩ理事エレクト、研修リーダーの関場氏ご夫妻などが、玄関に整列して迎えてくださった。〝我ら日本人、結束してがんばろう〟という意気込みの表れでうれしかったが、いかにも日本的だなぁという感想を持った。

そしていよいよ協議会が始まった。二〇〇六～二〇〇七年度のＲＩ会長であるウィリアムビル・ボイド氏が登場すると『Ｌｅａｄ　ｔｈｅ　ｗａｙ～率先しよう～』という大きなタイトルがスポットライトに浮かびあがる。そして湧き上がるスタンディングオベーション…。感動の場面ではあったが、そこには、冷めている自分がいることにも気づいていた。どっぷりとその場の雰囲気に浸ることができず、どこかこの仰々しい空気に反発する自分がいるのを感じていた。

全体会議では五カ国語が公式用語として採用され、イヤホンで日本語も同時通訳されていたため、非常にわかりやすいものだった。だが残念だったのは、小グループに分かれて行われた講義だ。私が期待していたのはロータリー原理についての講義だったが、内容の六～七割を占めていたのはロータリー財団について。そんな中で「ロータリーの哲学を勉強しに来たつもりが、財団の勉強会というのではおかしくないか」

という意見も飛び出し、まさにこの意見は、日本のガバナーの多数の意見を代弁していたようだった。その夜は青森の鐘々江義光君や、福島の寺島岩男君、そして『ロータリーの友』編集長・二神典子嬢とともに、ロビーのバーで遅くまで語りあった。仲間と話すことで、〝私が目指すロータリーとは？〟を再認識することにもなった。

研修は細かくスケジュールが組まれていたが、それほど苦しいものでもなく、楽しく七日間の行程が過ぎていった。しかし、一つ閉口するものがあった。それが食事だ。ホテルの中での食事は、大会議場を利用したバイキングスタイルだったが、研修期間中、常に同じメニュー。贅沢を言うようだが、私の口に合うものがあまりなく、しかも毎食同じ内容に辟易し、食が細くなってしまった。食堂へ向かうのが苦痛だったほどだ。余談だが、どうしてもその食事に耐えられなくなり、こっそり二度、家内とともにサンディエゴ市内の寿司屋に出かけた。その寿司屋のネタとしゃりがえらく良い。日本よりも良いのではないかと思えるほどで、それに驚いたと同時に、世界に広がる日本食文化ブームを実感することになった。

ある日の午後、サンディエゴが国境に近いこともあり、隣国・メキシコの小さな町の観光に行った。バスに揺られて国境を越えたが、再入国の際、私たち日本人パス

ポート所持者は諸外国人と比べ、細かくチェックを受けることもなかった。まさに、日本のパスポートはお守りのようなものだった。ここで改めて、ヨーロッパ諸国と同じように日本の信用度の高さを感じさせられた。

国際協議会のナイトパーティー。各国の趣向をこらしたステージが会場を盛り上げる。我々日本チームは揃いの法被(はっぴ)で踊りを披露。

気品と参加と伝承と

国際協議会から帰国した二週間後の三月十一日に、新設する地区チーム研修セミナーを、続いて十九日にはＰＥＴＳ（会長エレクト研修セミナー）を開催した。ここでは次期の地区運営方針を示し、ＲＩ会長のテーマを披露しなければならない。その挨拶の中には、次の三つの想いを入れた。

一つ目は「次年度は、例会を気品あるものにしようではないか」ということだ。私は常々、各クラブの例会に途中退席者が多いことが気になっていた。特にビジターの途中退席がとても目につき、そのクラブがどんなレベルのもとで運営されているのかすぐわかる。

二つ目は「ロータリー財団プログラムと米山財団へ、参加しよう」ということだ。なんとなく寄付をすればそれでいい…、そんな風潮がある中で、寄付だけに終わらず、参加することに意義があるということを伝えたかった。

そして三つ目は「ロータリーを学ぼう」ということだ。

このところ、ロータリーの哲学や歴史の継承が行われていないように思えてならない出来事が多かった。もちろん私自身も、〝ロータリーとは何か〟について再度勉強し、後輩へ伝えていかなければならないと思っている。その想いを、次期会長、そして将来会長になるであろう人たちに伝承したかった。この想いは、私が入会した頃の先輩が、私達に様々な機会を通して伝えてくれたものと同じものだと思う。

その具体例として揚げたのが、例会の会長挨拶のあり方だ。この貴重な時間を時候の挨拶にして欲しくなかった。ニュースや時候の話題を織り込むのはいい。だがそれに終始してしまってはロータリーの例会の意味を果たさない。ロータリーの情報をしっかり伝達する例会を開催してもらい、この小さな積み重ねがロータリーの歴史をつくり、次世代への継承になると思っているからだ。

時代は移り変わる

五月十三日。私は、第二八三〇地区鐘ヶ江ガバナー主催の地区協議会へ参加するため青森に向かった。事前に、協議会での講演を依頼されていたのだが、その内容

は「第二七六〇地区の出席率はなぜ高いのか」というものだった。現地のパストガバナーらが参加される中での講演で少々緊張したが、スライドを駆使し、なんとか無事終えることができた。

このテーマをいただいて以来、なぜ我が地区の出席率が良いのか、過去の文献や全国データを参照し分析してみたのだが、なかなか思うような答えが出ない。先輩に聞いてみても、笑いながら「そういう伝統だよ」という答えが返ってくるばかり。しかしさらに探ってみると、企業環境や地理的な条件など、第二七六〇地区には出席への好条件が揃っているようだった。もちろんそれだけではなく〝出席〟の意義をしっかり理解し、伝統としてきた数字の表れであることも間違いない。せっかく培われた伝統だからこそ、再度、きちんとした言葉にして伝承する責任があると感じた。

六月になった。あと一ヶ月でガバナー年度がスタートする。気持ちが焦る中、地区の広報委員会委員長・青木勇作氏を中心に、地区の広報は今後どうあるべきかを話し合った。

ロータリーでは「ポリオ撲滅運動」や「米山記念奨学会」などさまざまな対外的な奉仕活動を展開しているが、日本における認知度はそれほど高くない。その陰には、

日本には善行を隠すという美徳もあるように思う。しかし、これからはもっと自己主張する時代だ。他の団体と圧倒的に違う「ロータリー活動」をどう広報していけばよいか、これは今後の大きな課題になりそうであった。各クラブに広報委員会や情報委員会がある。このほか、ロータリー活動を紹介する『ロータリーの友』や会報なども存在する。だが、地区として見た場合の広報活動の見直しが必要だと思われた。

六月二十九日。年度の最終例会後、豊田市内の、ある洒落た店で「ガバナー決起集会」が開催された。鈴木元弘君（豊田ＲＣ）の司会でスタートしたその会は、プロの生演奏や歌まである豪華なものだった。素晴らしいネクタイまで贈っていただき恐縮したが、〝我がガバナー年度を成功させるぞ〟という皆の心遣いが何より嬉しかった。

ガバナーノミニーに推薦されて以来、どこかひがみを持っていた私だったが、どうやらその心の中は、若手メンバーに見透かされていたようだ。それがこうした気遣いになったと思うと、恥ずかしいやら申し訳ないやらでいっぱいだった。これまでも、まわりとの調整などさまざまな気苦労をさせたに違いない。皆のその苦労に報いるためにも、何としても目の前に迫ったガバナーの責務を立派にやりきらなければならないと決意を新たにした。

今伝えるべきこと。百年前を見直すこと

二〇〇六年十一月一日発行　ガバナー月信より

落葉の中でも最後まで残っているのがイチョウだとか。鮮やかな黄色の夕日に映えさせながら霜の訪れとともに落葉して冬を迎えるようです。

しかし、この四季の姿も地球の温暖化で紅葉は美しく染まることなく黄葉や茶葉となってしまい興醒めです。

第二五〇〇地区大会は紋別港RC主管で十月七、八日に紋別市で開催されました。旭川空港から峠越を往復しましたがまさに黄色中心の落葉の始まりでした。

第一日目のパネルディスカッションはシェルドンの〝He profits most who serves best〟をテーマに進められました。パネラーは第二七八〇地区パストガバナーのお二人、神崎正陳氏、松宮剛氏と小生の三人です。お二人は知る人ぞ知るロータリーの論客であり、ロータリー哲学には造詣の深い方であります。小生の役割は〝ボケ〟をやることだと心得て檀上へ。しかしこのテーマは小生には

荷が重過ぎました。シェルドンのこの第二標語は職業奉仕の真髄と云われ、大切に扱われて百年になろうとしています。

「ロータリーは職業奉仕！」と語り継がれており、新入会員のオリエンテーションでも〝まず職業奉仕〟と先輩より語られます。ロータリーに入会させていただいてから二十七年、私もそれをオウム返しで信じてきました。しかし、今『ロータリーは職業奉仕って本当ですか？』と考え込むようになりました。

ロータリークラブは今、四十代の青壮年経営者がどんどん入会してきます。彼等は一九七〇年代中頃には中・高校生として、父親が油にまみれ、夜遅くまで機械と取り組み「物づくり」に励んだ姿を見つめてきました。そして町工場から〇〇株式会社へと成長し、メイドインジャパンの商品を作り出す原動力の一翼を担ってきました。

ご存知の通りメイドインジャパンの製品は故障なく長持ちするとして世界中にあふれ、良質商品の信用を勝ち取ってきました。電気製品・精密機械製品の市場を独占したメイドインジャパン。しかし、これらを背景にジャパンバッシングが始まりました。そしてその結果として物づくり日本がその技術力を衰退させていくことを恐れ、心配した

二人のヨーロッパ人によってコー円卓会議がスイスで開催されました。やがてその会議にはアメリカの参加もあり、グローバル世界での「共生」が提案され、物づくりには環境にやさしいグリーン調達が必要であると確認されたのです。

即ち、物づくりの倫理基準は地球規模に拡大し、自然（地球）と「共生」できる基準が問われるようになってきたのです。

こうなってきますと一九一〇年～二〇年代に成立した物づくりの倫理基準は「当たり前の基準」であり、〝Who　serves　best〟は「自然との共生」をも解釈の中に入れなくてはならなくなります。ポール・ハリスの時代に願ったシェルドンの経営販売学の科学は、単に仕入先と販売先との公明正大で誠実な取引こそ企業の永続的な発展を保障する職業奉仕哲学だったはずです。しかし、今やこの当たり前となった基準は企業（職業）活動を永続させる前提条件なのです。ロータリークラブに入会してくる若手経営者にとっては当たり前の事であり、CSR・TRC・各種専門職協会の倫理宣言などの単語で語られているのです。この前提条件を身につけている若手経営者、若手専門家にロータリーは何を語り、何を中心テーマとして伝えればいいのでしょう。

〝ロータリーはクラブ奉仕だよ〟〝例会に毎週一回出席して異業種交流することだよ〟と語ればいいのでしょうか？

そうです！　今伝えるべき事は「百年前に戻りましょう」だと私は思います。自己を高めること、そして内なるエネルギーを高め、善行を求めるという精神活動にこそロータリーは回帰すべきでしょう。高められた内なる思いはインドへ、エチオピアへ一本の井戸を掘る行動へ導いてくれるはずです。

「ロータリーは職業奉仕だよ！」と、さも正論であるかのように言って例会の途中退席する奇妙な行動はロータリー運動に背をむける背信行為でしょう。顔を赤らめてうつむいて黙って途中退席するのがロータリアンとしての本当の姿でしょうか？

例会に出席し、培われた人間信頼友情交換は「お天道様に顔向けできない」様な事をしない人間へと成長させてくれるのです。職場へ帰ったら「お天道様が見ている」と仕事に励むのであります。おのずといわゆる職業奉仕を行っているのです。ロータリーは例会が全ての出発点ではないでしょうか？　ロータリーはクラブ奉仕ではないかと思いつめる昨今です。

〝秋深し、隣は何をする人ぞ〟物思う秋であります。ボケ防止の問題提起になれば望外の喜びであります。

未来につづくロータリーを目指して

二〇〇七年一月一日発行　ガバナー月信より

テキサスの野の東や初日の出　～米山梅吉（一九一八年ダラスの福島宅にて）～

新年明けましておめでとうございます。

米山梅吉翁が、ダラスの福島喜三次氏（のちの東京RC初代幹事）宅で詠んだ句であります。

このとき彼はロータリークラブについて福島氏から説明を受けていたのでしょうか？

一九二〇年十月二十日東京RCの創立総会が開かれましたから、いささか気になるところであります。

創立された東京RCは熱心なクラブ運営をするでもなく過ごしていたようですが、一九二三年の関東大震災に対する世界のロータリーからの支援の大きさに驚き、それを

境にロータリークラブの活動に力を入れるようになったそうです。

その後、大阪～神戸～京都～名古屋とつづくロータリークラブの設立は台湾、朝鮮、満州にも拡大し日満ロータリークラブ連名をも作ろうとする勢いで、世界情勢のためRーからの脱退と復帰というドラマを経てきました。復帰後の日本ロータリーは拡大と増強を続けロータリー財団寄付率第二位となりロータリー大国へ成長しました事は皆さん御存知の通りであります。

拡大と増強の物語は、「ヨーロッパの辺境の地の先まで領土を膨張させ、その先に没落を招いたローマ帝国」に似なければよいがと下衆の勘ぐりをする新春であります。

さて二〇〇七年はどんな年になるのでしょうか。昨年の世相を表す漢字は「命」でしたが、今年の師走にはどんな文字で表現されるのでしょうか、未来へつづく夢のある漢字でありたいものです。また今年の四月二十二日～二十八日の一週間は、三年に一度の「Rー規定審議会」がアメリカのシカゴで開催されます。

現在手許にある百六十一の案件を眺めてみますと世界のロータリアンがロータリー運動の中で何に関心を示し、何を改訂して欲しいのかが見えてきます。大雑把にまとめて

みますと

①クラブ例会数を週一回から月一～二回へ変更する。

②例会出席義務回数を半期六〇％、三〇％を五〇％、二五％にする。

③メイクアップ期間のしばりをもっとゆるめること。

以上の①～③に関するもの二十五件の議案提出予定となっていますが、Ｒ－の拡大・増強のための施策と勘ぐっていましたが、むしろロータリークラブ側の提案と見せ付けられてはロータリーの堕落としか考えられません。定款・細則を承認して創立したクラブなのに〝恥〟だと思わなくてはならない提案です。

④会員資格に弾力性をもたせて入会条件を拡げる（十七件）

これは増強の切り札となりますかどうか？

⑤プログラムを考える（三十九件）

一．ポリオを最後までやること。

一．「水」問題をポリオの後のテーマとして取り上げること。

一．青少年奉仕を奉仕の第五部門とすること。

一．インターアクト、ローターアクトの年齢制限の改訂。
一．ロータリー特別月間の変更を求める（水・友情・博愛・女性などを新設する）

⑥ロータリー財団に関して（二十三件）

一．ＤＤＦの二〇％地区補助金を三〇～四〇％へ引き上げる。
一．クラブの奉仕活動にＤＤＦを使えるようにすること。
一．マッチンググランドの最低額を二千五百ドルに下げるなど用途にも幅をもたせる。（現在五千ドル）
一．ＧＳＥの年齢をはじめ運用などにゆとりをもたせる。

プログラムや財団への提案はクラブが真剣にプロジェクトに取組んできた気持ちの表れと好感がもてます。

以上をまとめますとやはりＲＩは、ゆっくりと大きな方向転換をしつづけていることがうかがい知れます。

いつの時代からそれは始まったのでしょうか？

一九六六年RIはWCS活動に対する例外的措置として決議二十九～十二号を撤廃して金銭的援助を可能にしました。そもそもこれがロータリーの原則を破った始まりだったのかもしれません。つづく一九六八～六九年度理事会の決議によってWCSの性格が定義づけられたようです。決議は次のようなものです。

「世界社会奉仕は或る国のロータリークラブ又は地区が、他の国のロータリークラブに援助を提供して、そのロータリークラブが立案した自国の生活水準の向上に役立つ計画（必要を充たすための計画）の遂行に協力し、かくて双方の地域社会間に国際理解を増進することを目的としたプログラムである」

事ここに至ってロータリーの原則が無視され、大きく奉仕の方向転換が図られてしまったようです。それは以下の二点によるものです。

第一に他国のクラブの社会奉仕計画を我が国のクラブ又は地区が援助するプログラムであることはクラブの自治独立という原則を崩し、奉仕は個人として行なう原則をも壊していること。

二番目にWCSという性質上、単年度性とはなりえず、事業の継続性があり、地区委

員クラブ委員の任務も継続すべきことが求められ、個人を越え組織の活動になっていること。

この二つの事項は国際奉仕という第四の奉仕部門がロータリーに於いて確立した時（一九二一年エジンバラ国際大会）の基本理念〝団体的行動をとってはならないし個々の会員に対して云々〟に反するものです。

こうしてロータリーの歴史を振り返ってみますと曲がり角がはっきり見てとれます。

一九六六～六八年とつづくＷＣＳ（世界社会奉仕）というプロジェクトの確立はロータリーの伝統に革新をもたらした新しい奉仕のための組織運営の手法の出現と考えられます。この時から国際ロータリーは時代の要請を受けつつ四十年間方向転換を続けているようです。変化している事は変質していることと同じで注意が必要です。私達ロータリアンはこの新しい組織運営の手法に感心していてはいけないのであります。

あくまでもこれはロータリー運動の効率化を求める便法であることを再確認しておかなくてはなりません。絶えず軸足（ロータリー哲学）は固定しておかなくてはなりません。実践するにあたって、理念を確認しておく事が大切です。そして自信を持ってＷＣ

Sに参加しましょう。ポリオやきれいな水問題と取組みましょう。

はからずも一月は「ロータリー理解月間」であります。ロータリアンとして貴兄の人生観を整理する一年が始まると思いますがいかがでしょう。今年も良き年でありますよう御祈念申し上げます。

（追伸）二〇〇七年一月、二月の二回ラオスへWCS活動で行ってまいります。報告は順次させて頂きます。

志高き、選ばれし者に

二〇〇七年三月一日発行　ガバナー月信より

如月だというのに春一番に吹かれて東京へ行ってきました。二月十四、十五日の二日間、第二五八〇地区の地区大会が東京のホテルニューオータニで開催され、併せて、第三回ガバナー会が行われましたので、参加するためです。R会長代理は第三四六〇地区（台湾）パストガバナー（一九九五～九六年）林士珍氏でした。一九二八年生まれ、東大理学部出身で、流暢な日本語を喋ります。氏のスピーチの中から嬉しくなるようなすばらしい言葉がありましたので紹介します。「ロータリアンはエリートです。佐藤千尋

先生の文章『汝、選ばれし者』から引用させてもらえば〝育ちが違う〟のであります。育ちが違うというのは、氏出身、財産、地位、そして金ではありません。〝志の高さが違う〟ということです」と、堂々と自信に満ちて力強く語るその言葉に感動し、素直に同調できました。去る二月十日（土）南尾張分区のIMで、私は「ロータリアンはエリートです。一業種一人の原則に従って選ばれたリーダーです」と参加されたメンバーに語りました。エリートだからこそ高いレベルの資質と、企業のトップだからこそ純度の高い企業倫理とが求められるわけです。その事を我々は自覚しておかなくてはなりません。

大会二日目、氏は『新会員に期待する』と題して講演されました。ロータリーは、自己研鑽と職業奉仕そして地域のニーズに応えた奉仕活動という原則を守らねばならない、と訴えました。そして次世代を育てる事こそロータリーの仕事である。台湾にもロータリー奨学金制度があり、この恩典を受けた学生から一通の年賀状もなく、OB達はロータリーに入会するでもない。他方、米山奨学生のOB達は、ロータリークラブに入会しロータリーの大きな力となって努力している。この違いは何なのか？　〝志の高さ〟からくるものなのか、ロータリーは家庭教育をもテーマにしなくてはならないので

※1　インターアクト・ローターアクト
インター：14歳～18歳の青少年男女、または高校生のための社会奉仕クラブ。ローター：18～30歳の青年男女のための社会奉仕クラブ。

※2　ローテックス
青少年交換プログラムの派遣学生として海外に留学した経験を持つ帰国学生によって組織されたクラブ。

はないか、ともスピーチされました。

ロータリーは次世代の為のプログラムを数多く持っています。その中の一つがローターアクトクラブであることはご存知の通りであります。今月十三日を含む一週間は、世界ローターアクト週間ですが、この週間を含めローターアクトが年々少しずつ理解されなくなっているような気がします。それは提唱クラブが少ない事、新入会員のオリエンテーションでリーダーから語られない事、クラブ会長が特別月間、特別週間に際して会長挨拶としてスピーチせずに、もっぱら自分の趣味やら人生観、果てはTV新聞の記事について感想を述べるという、クラブ会長としての任務を放棄するにも似た行為を行っていることに起因していると考えられます。クラブ会長はロータリー情報を語るべきです。新世代の為のプログラム（インターアクト[※1]・ローターアクト、ローテックス[※2]、ライラ[※3]、ロータリー青少年交換、米山・ロータリー財団奨学生、GSE[※4]）、そして最も大切な各クラブ独自の次世代のためのプログラムを大切に育てたいものです。各々が問題を抱えていますので、クラブに地区に合ったプログラムに軌道修正していただきたいと思います。

※3　ライラ
Rotary Youth Leadership Awards：14歳～30歳までの若いロータリー青少年指導者養成プログラム

※4　GSE
Group Study Exchange（研究グループ交換）異なる国の二つのロータリー間で、チームを相互に訪問し、国際間の理解と友好の増進を図る制度。

次にガバナー会の報告をします。今年度に入りましてから、CLP[※5]、地区危機管理委員会という新しい用語にお気づきになられたと思います。CLPはPETS[※6]、地区協議会でまがりなりにも大枠として理解されたことと存じます。それはそれで会長ご自身のクラブでご検討して下さるように引き続きお願い申し上げます。もう一つの地区危機管理委員会という委員会は、NPO～ガバナー会青少年交換委員会と密接に連絡を取り合いながら、青少年育成プログラムに関わる全てのリスクに対応していこうとする委員会であります。そして保険に加入することによって、そのプログラムを担保していこうとするものであります。プログラム推進にあたり、この事は合理的で安心できるようにみえますがこれは実に悲しい事だと思います。

善意から生れた青少年育成プログラムの遂行中に発生した様々なトラブル（セクハラ、災害事故、病気等）が善意の人間の落ち度として社会的責任を問われるという事実であります。その時代に生れてくる社会的判断基準という不変性のないもので判定される不条理であります。それでもその不条理を乗り越えて、我々ロータリアンはそのプログラムを遂行しなければならないのです。何万分の一のリスクをおそれて次世代育成の

※5　CLP
クラブリーダーシッププラン。クラブの安定性、発展、成長を目指して展開するクラブごとの活動。

※6　PETS
会長エレクト研修セミナー。

為のプログラムを中止してはならないのです。「今どきの若い者は！」と云われがちながら次世代は育ってきました。ＤＮＡを引き渡すとはそういう作業の積み重ねなのではないでしょうか。ロータリアンは〝育ちが違う〟のです。高い志を持ち続けて次世代を大切に育て確実に我々のＤＮＡを渡したいものです。

ところで今年の冬は、冬だったのでしょうか。老いの身には有難いことですが、地球の変化に不気味さを感じます。環境保全という言葉に虚しさを覚えます。

あと四ヶ月！　お互いに最後の詰めを行いましょう。

エピソード 2

「自己研鑽」。それは自分自身が幸せになること

「自己研鑽」できること。これが、私がロータリーに入会していることの大きな意義の一つだ。そして「自己研鑽」の目的は、自分自身が〝ハッピー〟になることだと思っている。先日、ロータリーの奨学生としてフランスに留学した女性から質問が

あった。それは「私は留学させていただいたことに対して、ロータリーに恩を感じ、嬉しく思っている。けれど、そもそもロータリーは誰を幸せにすることを目標にしているのですか?」というものだった。

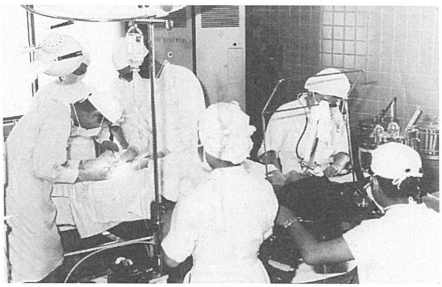
禅問答のようで難しい質問だ。考えながら私は答えた。『〝恵まれない子どもたちのために〟〝一人暮らしのお年寄りのために〟…。社会的な弱者を救おうとする運動や活動は多くある。しかし、ロータリーはそれ自体を目的にしていないと思っている。ロータリーが最終的なターゲットにしているものは〝自分〟。自分が幸せになれずに、人を幸せにできないからね。その考え方を学べるのがロータリーじゃないかな』と。

私がロータリーに入会させていただき三十年。クラブの副会長となり、初めてロータリーについて学びはじめた。考えはじめた。ロータリーの歴史を知り、ロータリー哲学を学んだ。そこで出会ったのが「自己研鑽」という言葉だった。まず自分がいて、自分自身が幸せにならなければ人の手助けなどはできない。自分の職業を真面目に務め、自らの身を律し、磨いてこそ人は幸せになれるという訳だ。

これが「I　serve」の考え方だと思っている。〝団体として皆でやろう〟と言う前に、まず〝自分がやろう〟これがロータリーの原則だとも思う。

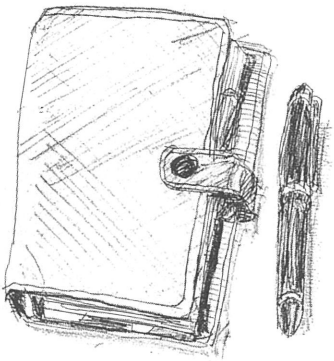
ガバナーを経験させていただいた私だが、これからも自己研鑽に努力し、もっとハッピーになり、そして周りも幸せにできれば、そう思っている。難しいことだが…。

浜松遠州総合病院、豊橋市民病院勤務時代の昭和41年～45年頃。ギターマンドリンクラブを結成し、合宿なども行っていた。



珍しい手術中の写真。まだ、執刀医になったばかりの頃。

2003年2月、ロータリーの仲間と乗鞍高原へ。
今もスキーは現役。



第三章

ガバナーという仕事

ロータリーの精神（こころ）を受け継いで

七月一日、いよいよガバナー年度がスタートした。初仕事となる新旧ガバナー会に出席するため、朝の新幹線で東京・新高輪プリンスホテルへ。スケジュールは二日間で、ロータリー財団委員会や青少年交換委員会も同時開催された。

会場には全国の同期ガバナーが一堂に会していたが、百年という歴史をもつロータリーにとって、我々は第二世代。過渡期にある今だからこそ、『過去を振り返り、自分たちの足元を見直さなければならない』と改めて考えさせられた。まさに齋藤年度の運営テーマに掲げた「原点回帰」の精神を基軸にして、ロータリーの精神を次世代に繋げていかなければならない。今、過去を振り返っておくことが、私たちの責任でもあるのだ。

七月三日。この日は地区幹事の藤井君と共に、愛知県知事の神田真秋氏を表敬訪問した。知事公舎でお迎えくださった知事に『第二七六〇地区の新年度ガバナーに就任した齋藤です。当地区の歴代ガバナーは素晴らしい方ばかりでその責務の重さに身が

引き締まりますが、全力で大役に取り組むつもりでおります』と挨拶。

これに対して、知事は「愛知県のロータリーは元気があり、心強く思う。愛・地球博ではロータリー館で大変お世話になったが、海外からの来客も多く、ロータリーの力を見せられた。地区のロータリアンには経済界の中心人物も多い。元気のよい愛知県のガバナーは大変な激務と聞くが、身体に気をつけて頑張ってください」とエールを返してくださった。同時に十一月に開催される地区大会への出席を要請したところ「喜んで出席させていただきたい」と快諾していただいた。

その足で中部経済新聞社に向かい、加藤渉社長らと懇談。同紙では度々ロータリーを取材し、紹介してくださっている。それに対する感謝とともに「ロータリアンはPRが下手で、自分たちの活動をうまく世の中に伝えられない。それを悔しく思っている仲間も多いだけに、今後もぜひ取材、報道をお願いしたい」という思いを伝えた。社長からは「各クラブとも取材に好意的でありがたく、今後も積極的に報道していきたいと思う。ロータリーとしてもおおいに活用してください」と、力強い言葉をいただいた。広報活動を充実させることは、齋藤年度の目標のひとつだ。

翌四日から七日にかけては、クラブ奉仕委員会、新世代委員会、社会奉仕委員会、

地区ロータリー財団委員会と立て続けに委員会が開催された。各委員会では新委員長が一年の抱負を語り、その熱意を感じ取ることができた。

七日は委員会後に中日新聞社を訪れ、同社の最高顧問であり第二七六〇地区のパストガバナーでもある大島宏彦氏とお目にかかった。八日は齋藤年度として初めての地区諮問委員会が開催された。この委員会には十三～四名ほどのパストガバナーが出席することもあり、私の緊張度はかなり高いものとなった。重鎮メンバーを前に、私は新ガバナーとして挨拶し会を進行したが、不慣れなこともあり身体が宙に浮いているような感じだったことを覚えている。十一日はライラ委員会、十三日は豊田ロータリークラブで地区方針を発表。十五日には米山奨学生学友総会が開催された。

その後も七月末までさまざまな委員会や訪問が続き、かなりハードなスケジュールではあったが、ガバナーとしての仕事にやりがいを感じる一ヶ月でもあった。

各クラブの〝温度〟を感じた、公式訪問

八月に入るといよいよ公式訪問が始まった。これは地区内各クラブの例会に、ガバ

ナーが公式で訪問するというもの。年度テーマや地区目標を伝えるとともに、各クラブの活動内容をガバナーが把握するという目的がある。

その一番目として訪れたのは、名古屋中ロータリークラブだった。同クラブは、地区大会のホストクラブをお務めいただくことになっており、表敬の意味も込めて最初の訪問先とした。だが、そこにはロータリーの生き字引とも言える加納泉パストガバナー、名古屋ＪＣ時代からの先輩、森田素生氏など、大先輩方の顔も多く見られ、またもや緊張の連続となった。

しかし嬉しかったのは、名古屋中ロータリーの会長である岡野剛久君の計らいで「例会には最後までしっかり参加しよう」という意味の川柳が、各テーブルに置かれていたことだった。どうやら、岡野会長は以前ＰＥＴＳで私が話した『ロータリーを格式高いものにするためには、早退をできる限りなくさなくてはならない』ということを覚えてくださっていたようだ。こういった心遣いは非常に嬉しく、新米ガバナーの心の支えになった。

その後、十一月までの約四ヶ月間で合同、単独合わせて四十五回の公式訪問を行った。

ここで、特に心に残った訪問を紹介したいと思う。

その一つが、一宮ロータリークラブでの出来事だ。ロータリーの例会は通常、昼食をはさんで行われるが、この日の昼食メニューとして用意されていたのがカレーライスだった。聞くとそのカレーのトッピングには月桂樹の葉が使われているという。

日本のロータリアンにとって月桂樹には特別の想いがあり、その歴史は七十年以上前に遡る。

一九三五年のこと。ロータリーの創始者・ポールハリス氏が来日した際、日本のロータリーの発展を誓い、出迎えたロータリアンとともに帝国ホテル中庭に植樹された樹、それが月桂樹だった。

聞けばこの日のカレーライスに添えられていた葉は、その月桂樹から株分けされたものだという。

一九六九年の帝国ホテル改築時にそのポールハリスの月桂樹は三島の米山記念館に移植されたが、一宮ロータリークラブ初代会長の安野譲次パストガバナーはそれを株分けしてもらい、自宅の庭で育てられていたという。その後、同クラブの創立三十五

周年記念としてクラブが樹を受け継ぎ、現在は一宮市内の真清田神社の社殿横に植えられている。

その月桂樹の葉をこの日の昼食のために、神社の宮司でもあり、ロータリーアンでもある飯田清春君や大森幹事らが採取してくれたという。目に見えないもてなしではあるが、深慮されたに違いないその気持ちは私の心に深く届き、ただただ感謝するばかりだった。

八月に訪れた豊橋ロータリークラブでは、ロータリーの古き良き伝統を肌で感じさせていただくことができた。

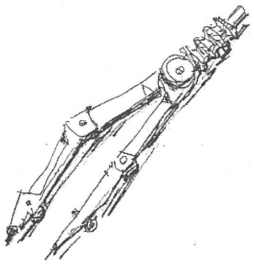
その日、ガバナーの私を例会会場まで先導してくださるＳＡＡ（会場監督／Ｓｅｒｇｅｎｔ ａｔ Ａｒｍｓ）は、私の前に古式ゆかしいイギリス議会の議員とおぼしきコスチュームを身につけて現れ、手に持ったベルを鳴らしながら会場まで案内してくださった。昔からの形式を守り伝えるその姿から、同クラブが歴史を重んじ、次世代へと伝承したいという気持ちをくみ取ることができ、印象深いものとなった。

半田ロータリークラブでは、クラブ内に独自の会員教育のシステムを設けているこ

とが説明された。メンバーを三つのグループに分け、一グループ三回の研修会を行うというシステムは大変興味深く、それ以後の公式訪問では他クラブに紹介している。

このほか新城の和菓子や、安城のお茶、岡崎の日本酒など地元の素晴らしい名産品をお土産としていただくことも多く、これは家内とともに楽しく美味しく味わわせていただいた。

ところで、田原ロータリークラブへ向かったときのこと。当時、発売されたばかりのレクサスを手に入れた私は運転を楽しみたく、地区幹事の藤井君を乗せて現地に向かった。しかし帰り際、見送りに出たメンバーから「あれ？　ガバナーが自分で運転されている」と驚かれてしまった。どうやらガバナーは、後部座席にどっしりしていなければならない、そんな存在のようだ。



各クラブの方針、考え方、想いなどを肌で感じることができた公式訪問。
まさに百聞は一見にしかずだ。

齋藤ガバナー公式訪問日程表　06年

7月31日(月)　名古屋中RC
8月8日(火)　犬山RC・小牧RC
8月9日(水)　名古屋守山RC
　　名古屋名北RC
8月22日(火)　名古屋RC
8月23日(水)　名古屋西RC・名古屋名駅RC
8月24日(木)　豊橋RC
8月29日(火)　瀬戸RC・愛知長久手RC
8月30日(水)　岡崎RC・岡崎東RC
8月31日(木)　半田RC
9月1日(金)　名古屋北RC・名古屋錦RC
　　名古屋葵RC
9月4日(月)　あまRC
9月5日(火)　江南RC・岩倉RC
9月6日(水)　安城RC・三河安城RC
9月8日(金)　豊川RC・新城RC・奥三河RC
9月13日(水)　豊橋ゴールデンRC・豊橋東RC
9月14日(木)　名古屋大須RC・名古屋栄RC
9月15日(金)　常滑RC・知多RC
9月19日(火)　春日井RC・豊山－城北RC
9月20日(水)　碧南RC・一色RC
9月21日(木)　東海RC・大府RC
9月22日(金)　名古屋みなとRC
　　名古屋西南RC
9月25日(月)　名古屋空港RC
9月26日(火)　蒲郡RC・豊川宝飯RC
9月27日(水)　豊田東RC・豊田中RC
9月29日(金)　一宮北RC・一宮中央RC
10月3日(火)　名古屋名東RC
　　名古屋千種RC
10月5日(木)　半田南RC・東知多RC
10月10日(火)　岡崎南RC・岡崎城南RC
10月11日(水)　名古屋清須RC・尾張中央RC
10月13日(金)　津島RC・稲沢RC
10月16日(月)　豊橋北RC・豊橋南RC
10月17日(火)　西尾RC・西尾KIRARA
10月18日(水)　名古屋和合RC
10月18日(水)　名古屋昭和RC
10月19日(木)　名古屋瑞穂RC
　　名古屋名南RC
10月23日(月)　名古屋東RC・名古屋東山RC
10月25日(水)　知立RC・高浜RC
10月26日(木)　一宮RC・尾西RC
10月27日(金)　尾張旭RC・瀬戸北RC
10月31日(火)　田原RC・田原パシフィックRC
11月1日(水)　渥美RC
11月6日(月)　刈谷RC
11月8日(水)　名古屋南RC・名古屋東南RC
11月13日(月)　豊田西RC・豊田三好RC
11月16日(木)　豊田RC

公式訪問を終えて

ガバナー公式訪問を終えた直後、私はガバナー月信にメッセージを寄せた。読み返すと、そこからは公式訪問を無事終えた少々の安堵感とともに、第二七六〇地区の各クラブをなんとかして盛り上げたいと願う当時の情熱が読み取ることができる。

二〇〇六年十一月十六日。ホームクラブの豊田ロータリーを最後に、全ての地区内クラブの公式訪問を終える事が出来ました。公式訪問に際しましては会長・幹事の皆様方に大変丁重なるお迎えと、それに続く会長・幹事懇談会を和やかにお進め下さいまして心より御礼申し上げます。

訪問させていただくクラブの年度計画書はきちんと二～三日前より読ませて頂き、その都度質問事項などチェックさせて頂きました。

そして次々と示される新情報に大きなカルチャーショックを受けました。

第一に見させて頂いた事は会員の教育プログラムであります。新入会員に対して、五年、十年と経ったメンバーの再教育に対してどのような方法でロータリー情報を伝えて

いるのかという事であります。これは強力な退会防止策であるからです。入会して以来、IM、地区大会、世界大会に参加したことがないとか、クラブの研修会に出席したことがないなどの質問もしました。これは杞憂に終わり胸をなでおろしています。

第二番目は会員増強に対する具体的な方法であります。御存知の通り会員を増やしましょうと言っても増えません。会長の強い意志と方策がないとメンバーは増えませんので、その辺りのことをお尋ねしました。

三番目は出席を促すために出席委員会はどのような戦術をとっているのか、クラブの長老を加えたリーダー達は毅然とした態度を取っているのか、メーキャップして他のクラブの見学を勧めているのか、などでありました。これ等の会活の中で「スリーピングメンバー」という由々しき単語が出てきたのは驚きました。長期病気入院の場合はともかく、お仕事に専念されているにも関わらずホームクラブの例会には欠席しメーキャップもしないメンバーはクラブ細則にその処遇は明記されているはずであります。

四つ目は例会の途中退席でありますが、これは非常に少ない事が判明しホッとしています。

五番目の質問事項は社会奉仕、国際奉仕などのプログラムであります。

クラブ奉仕が充実し例会などが円滑に作動していないとこのプログラムは立案されませんし、従来から地区まかせの金はクラブ毎の一覧表となっているので少ないところはよろしくと頭を下げ、平均以上のクラブさんにはありがとうと頭を下げてきました。この「地区に金をおさめて全てを一任します」という寄附行為はロータリー運動全体を眺め理解して初めて納得してから行うべき行為であると考えますので、その辺の情報活動を会長さんにお願い申し上げます。

終わってしまえば楽しかった公式訪問でした。知人が増えました。三十年前の友人に会えました。素晴らしいプログラムを持つクラブを発見しました。そして地区内外へ伝えたいと思いました。

ロータリーは人との出会いと自己研鑽ということが実感できました。新しい感動を求めてWCSやGSEにそして新世代のためのプログラムに参加してみようかなという気持ちにさせて頂いた半年間でありました。

本当に色々と有難うございました。

ガバナー最大行事、地区大会開催へ

週に二～三回の公式訪問を繰り返し、県内各地をまわった八月から十一月にかけては、まさに目がまわる忙しさだった。しかし、訪問が終わってもホッとすることはできない。公式訪問の全日程終了直後の十一月十八日、十九日には、ガバナー年度の最大行事とも言える地区大会が控えており、その準備にも追われていた。

地区大会はガバナー年度における大事業の一つだ。それだけにこの地区大会開催には、毎年、ガバナーが頭を悩ませる。齋藤年度の地区大会は、ホストクラブを名古屋中ロータリークラブに、大会実行委員長を一柳錘君にお願いして事前の準備を進めていた。会場はウェスティン名古屋キャッスル、大会テーマは『原点回帰～その精神（こころ）を受け継ぎながら～』とした。

この中のメインイベントとも言える基調講演は、日本経済団体連合会名誉会長でトヨタ自動車取締役相談役の奥田碩氏に依頼した。ロータリーセミナーの講師には、私の地区運営方針「原点回帰」のフレーズヒントをくださった佐古亮尊氏を長崎からお

招きすることが決まっている。また地区大会を〝親睦と学びの場〟と考え、大会プログラムのさまざまな場面にピアノやヴァイオリン演奏などの音楽を取り入れ、楽しみながらロータリーを学べる二日間を演出することにした。この企画を立案し、格調高いものに仕上げていただいた名古屋中ロータリークラブさんには、感謝しても感謝しきれない恩がある。自分自身もスピーチのイメージトレーニングやリハーサルを繰り返し行った。それはそれで、辛くも楽しい時間だった。

地区大会当日…。一日目はセミナーや各委員会報告などが行われた後、佐古亮尊氏に「ロータリーの森を歩く～クラブ奉仕について～」というテーマでお話しいただいた。佐古氏は戦後の実話を基にして〝人の誠意は必ず人の心に通ずる〟と説かれたのだが、住職をされているだけにその話は心に深く響き、涙を流しながら聞き入るロータリアンの姿も多く見られた。そういう私も、講演後の御礼の挨拶では壇上にも関わらず涙ぐんでしまい、恥ずかしいことに涙声での挨拶になってしまった。これは後で女房に怒られることになった。

夕刻からはＲＩ会長代理ご夫妻の歓迎晩餐会。ここでは愛知の第二七六〇地区と青

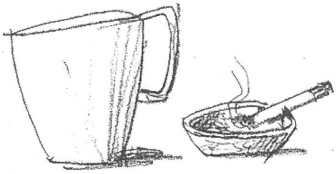
森の第二八三〇地区が二年間の友好協定を結ぶための調印式も行われた。それまで日本では地区という大きな管轄で友好協定を結ぶことはなく、日本初の地区友好協定締結だ。これは両地区のパストガバナーらの支援があり実現したもので、ロータリーの目的の一つでもある〝人的交流〟〝仲間の輪〟を、より広げる良いきっかけづくりになったと思う。この青森の仲間たちとは今も交流を続け、良き仲間関係を築いている。

地区大会二日目には、奥田碩氏による基調講演が行われた。テーマは「世界の現状と日本の針路」。日本の経済界をけん引する奥田氏の講演は核心を突き、一時間半があっという間に過ぎた。この間、席を立つものもおらず、そのパワーを感じながら話に耳を傾けた訳だが、その後のことを思うと私は落ち着いていられなかった。なぜなら、奥田氏の話が終わった直後、私はガバナーとして講演の御礼と講評を述べなくてはならないのだ。話を伺いながら講評の内容を考えるのは至難の業。しかも日本の指導者とも言える奥田氏の講演についての講評だ。壇上に上がると、会場は一番奥の人の顔が見えないほど埋まっており、緊張がさらに高まったが『日本国民のために、良きリーダーであり続けていただきたい』というように締め、大きな拍手をいただいたことを覚えている。

とにもかくにも、大仕事の地区大会は無事終了した。二日間の地区大会に参加したのは総勢二千七百七十二人にものぼり、大成功となった。

その日の夜は気が置けない仲間ら七～八人で、伏見にある堀川沿いの赤ワインの美味しい店で打ち上げ会を行ったが、『ガバナーとしての仕事の峠を越えられた』そんな安堵感の中で気持ちよく酔うことができた。

こうして齋藤年度の地区大会は上手く花を開かせることができたが、これは名古屋中ロータリークラブがもつ素晴らしい人材と人脈から生まれたことは間違いなく、ここで再度、厚く厚く御礼を申し上げたい。



地区大会本会議での点鐘。ガバナーとして最大の行事は、皆の協力のお陰で大成功を収めることができた。

感謝と感動の地区大会を終えて

二〇〇六年十二月一日発行　ガバナー月信より

地球温暖化とは申せ、さすがに十二月に入り寒さが少しずつきつく感じられるようになりました。その後いかがお過ごしでしょうか？

二〇〇六～〇七年度の上半期が終わろうとしていますが各委員会の活動はいかがでしょうか？

去る十一月十八日、十九日RI会長代理・宮崎茂和様（福井）をお迎えして開催された地区大会はコールロータリーの合唱とともに幕が上がり、お陰様で大成功のうちに幕を閉じることができました。一重にホストクラブの名古屋中ロータリーの皆様の献身的なご努力によるものと厚く厚く御礼申し上げます。連日にわたり深夜まで、あるいは朝からのリハーサルは鬼気迫るものであり私も近寄り難いものがありました。しかしその甲斐あってタイムスケジュール通り、一時の隙もなく閉会の点鐘となりました。

大会一日目のロータリーミーティングの講師・佐古亮尊様（RID二七四〇PG）の

『ロータリーの森を歩く～クラブ奉仕について～』と題された御講演は「ロータリー運動とは」という難解な命題の解説であったと感謝申し上げます。

ロータリーの発生、一九一一年ユリンズの〝Service not self〟、そしてシェルドンの〝He profits most who serves best〟、その後の論争と二十三～二十四号決議案による解決とロータリーの発生史を述べられ、「ロータリー運動の原点は例会にある。そこで培われた自己改革のエネルギーは黙っていても周囲への改善の波となって影響を及ぼすいわば倫理運動である」と強調されました。さらに理屈だけでなく奉仕（実践）へと発展しなくてはならないのだが奉仕を売って歩いてはならないと警告を発せられました。

その夜のＲＩ会長代理を囲む晩餐会の席上では第二八三〇地区（青森）の鐘ヶ江義光ガバナーと友情地区協定締結書の調印を交わしました。青森地区と人の交流、ロータリー友情交換などからスタートしてはいかがかというものです。

大会二日目は各種表彰とともに元ＲＩ会長フランク・デブリン氏の認証ポイントによるポールハリスメタルが宮崎茂和ＲＩ会長の手から蒲郡市在住の小澤秀雄氏に贈呈され

ました。

地区大会記念講演は奥田碩氏が「世界の現状と日本の針路」をテーマに、素人にも解るように丁寧に話されました。大学における講義を聞くように大勢のメンバーがノートにメモを取っていました。それほど貴重な情報でありました。日本が抱える問題点を五つ指摘しその一つ一つが我が国にとってどういう影響を及ぼそうとしているのか、そして現状はどうなっているのか、今後はどうなるのかを述べられその問題を乗り切る方策は何かを解り易く解説して頂きました。専門外のため知識の浅い私には〝目からウロコ〟であり、とても有意義な御講演でありました。

さてこの地区大会の前座として「R－D二七六〇第一回地区指導者育成セミナー」が初めての試みとして開催されました。二百四十人にも及ぶクラブリーダーの研修会であり、これまた新設されたロータリー情報委員会が主催したものです。

第一回目である今回はクラブの指導者が、地区全体の情報に欠けることがないよう情報を共有していただこうという主旨を盛り込んだ企画でした。

このセミナーが江崎ガバナーエレクト、片山ガバナーノミニーに継続され、しっかり

した姿、形に出来上がっていくことを期待しています。

地区大会はその年度のＲＩ会長テーマの理解と普及を開催目的の一つにしております。今回は〝Ｌｅａｄ　ｔｈｅ　ｗａｙ〟をメンバーの皆様方が御理解しながら参加していただいたものと確信しております。

年の瀬を迎え何かと慌ただしくなります。巷では嘔吐と下痢が併発したノロウイルスらしき感染症が流行りだしていますので体調管理に努められ、よき新年をお迎え下さいますように祈念しております。

タイ、ラオスで目の当たりにした世界の現状

年が明けた二〇〇七年一月二十日。第二七六〇地区のメンバー二十二人は、タイ及びラオスへ向かうため、セントレア空港を飛び立った。これはＷＣＳ（世界社会奉仕）活動の一貫として、第三三六〇地区（タイ国／チェンマイ・チェンライ）と交流し、タイとラオスの恵まれない地域の子どもたちを支援しようと実施されたものだ。

最初の目的地タイのチェンマイの空港に着くと、大勢の小学生が盛大に出迎えてくれ、ホテルまではなんとパトカーに先導されて向かうことになった。警察署長がロータリアンということもあり、ご配慮いただいたようだ。

タイでの活動目的は、七十人の小学生を対象に奨学金を授与することと、昨年度のＷＣＳプロジェクトで支援した施設の状況を視察してまわることでした。二十五年間にも及ぶという「愛知奨学基金」の金利でまかなわれるという奨学金、その奨学金授与式には現地の新聞やテレビの取材も入り、私は二〇〇三年～〇四年度ＲＩ会長ビチャイラタクルさん（タイ）のテーマを取り上げ『一緒に慈愛の種をまいていきましょう』と挨拶した。

翌々日は昨年度に支援した施設のいくつかを視察してまわった。少数民族のための授産所や、メタンガスの燃料化装置の設置状況などだ。ＷＣＳの支援結果を実際に目にして私は大いに感動したが、それと同時に腹立たしさもこみ上げてきた。この実績を、果たして我々の地区メンバーはどの程度認識しているのだろうか。もちろん、私も含めてだが…。

確かにＷＣＳにはかつて、いくつかの問題点があり、援助金の使途不明問題などが

原因で、活動自体を控えてしまったクラブもある。しかしその方法が改善された現在の一番の問題は、ロータリー内の伝達機能が麻痺し、活動内容の詳細がクラブの隅々まで届いていないこと自体だと思えてならなかった。

二十四日。我々一行はタイ国境を越え、ラオスのルアンプラバンに移動した。ここはラオス第二の都市で、一九九五年、世界遺産に登録された仏都だ。

この街から車で九十分ほどのハットファイ村には、すでに昨年のWCS活動として小学校が建設されている。そして今年は、街から車で六十分ほどの村落ホアイサラー村に二つ目の小学校を建設し、この日に引渡し式が行われることになっていた。

街を出るとすぐ舗装が途切れる。その固い道路で砂を巻き上げながら走ること一時間。すると赤茶けた山腹にしがみつくように建つ、竹や椰子の葉で編まれた十坪ほどの小屋がバラバラと立ち並んでいるのが見えてきた。どうやらここが集落のようだ。

その先に見える谷川を渡ると広場があり、その奥に二十畳敷きの二つの教室、そして十畳ほどの教員室がある小学校が建っていた。

建物は言ってみればバラック建ての質素なもの。しかし、まわりの家に比べればそれは立派なものに見える。村人たちは本当に喜んで、正月の祭りをわざわざ今日まで

延ばし、引渡し式を盛大に祝ってくれた。正面の壁には、第二七六〇地区全八十一クラブのバナーが貼られ、日の丸とロータリー旗がその中央に並んでいた。

そこで私はこう話した。『勉強して偉い人になって、この村に帰って来て下さい。この村を豊かにする努力をして下さい』。成長し、村に文化を持ち帰ることで、初めて村に恩返しができると私は思う。

引き渡し式は民俗舞踊なども披露される大変賑やかなものになった。その夜、郡長、村長、ＦＯＲＣＯＭのスタッフを交え川辺のレストランで祝いの宴が催されたが、この地では祭りの夜にローソクを入れた提灯を夜空に舞い上げる風習があり、私たちもいくつかを空に飛ばした。その幻想的な光景は今も忘れることができない。

それから約一ヶ月後。二月二十五から五日間、名古屋みなとロータリークラブのＷＣＳ活動に参加して私は再度ラオスを訪れ、消防車の寄贈や歯科検診・予防などの啓蒙教育、絵画交換会などを行った。

私には〝ロータリーはあくまでも自己研鑽の場だ〟という持論があるが、その一方で世界規模の問題に取り組むロータリーでもありたいとも思う。今回の二回の訪問で、素晴らしい成果は得られたが、今後、ロータリーの奉仕活動を単なる奉仕活動で

終わらせないためにも、どこが限界点なのか深慮する必要があると感じた二回の訪問だった。

世界理解とは…

二〇〇七年二月一日発行　ガバナー月信より

厳寒の候、御見舞い申し上げます。

師走の太陽と比べて二月の陽光は力強く輝きが少し増しているように感じられます。

二月は世界理解月間ですが「世界理解」という熟語はなかなか一般の人には〝理解〟しにくい言葉ではないでしょうか。

世界平和に欠かせない国際理解と親善を深めＷＣＳを中心としたプログラムに参加しようということであります。

そもそもＷＣＳは前月号でも触れました通り、ロータリー運動（哲学）そのものを変質させ方向転換させた張本人であります。

ロータリーの奉仕活動を個人からクラブないし地区へ、単年度から数年度へ（プログラムも人事も）変化させたのですが、意外にも職業奉仕至上主義の先輩ロータリアンに

は見逃されてきてしまいました。ＩだＷｅだとかＨｅだＴｈｅｙだとか論じている間にこの「変質」はロータリー運動を曲げて方向を少しずつずらしています。

ＷＣＳのプログラムは相手国のニーズに援助をすることによってその国のロータリアンに勇気を与えその地域の人々に自立の意識を芽生えさせる行為なのです（と私は考えていますが）。ともすればそれは不遜であり、思い上がりでもあるので充分にそのことに考えを及ばせなくてはいけません。

一月二十日（土）にセントレア空港を発った地区ＷＣＳの活動メンバーは水谷委員長を団長とする二十三人でした。勿論、小生も参加しました。タイの第三三六〇地区（チェンマイ・チェンライ地区）の御尽力とＪＩＣＡのご協力のお陰でラオスのホアイサラー村の小学校の建設・引渡を行ってまいりました。地区一任の資金三百三十七万円を有効に使用するのを確認したいという思いもあります。詳細はＷＣＳ委員長より次月号で報告させていただきます。

今月二十四日～三月一日には名古屋みなとＲＣの野村会長のお誘いでラオスのＷＣＳ活動に参加してビエンチャンへ行ってきます。この二回のラオス紀行はロータリアンと

しての小生に何を与えてくれるのでしょうか？　一人の老境に入った男にどんなショックを与えてくれるのでしょうか？　実に楽しい限りです。

さてロータリー年度も下半期に入りました。クラブでは次期役員も決まり会長エレクトを中心に胎動があるでしょうが、会長・幹事の皆様にとりましては成果が有った無かったかを決める総仕上げの期間であります。どうぞ気を緩めずクラブ運営を今まで通り実施して下さい。また委員会活動のまとめと次期へ渡せるものは何かをチェックして下さい。

今年度は一時お休みを頂いていたＩＭを再開させました。各分区のガバナー補佐さんの並々ならぬ御努力で開催されますが従来のようなＩＭから脱皮してコーヒー一杯の親睦と研修に集中して実り多きものになるよう御努力下さい。そして貴クラブの次なるリーダーを育てるプログラムの一環として御利用下さい。まだまだ寒さは続きます。御自愛されますよう。

ＩＭ再開で見えた、分区内同士の連携。横のつながりは〝輪〟を強くする

二月に入り、各分区のＩＭがスタートした。今年度復活させたＩＭだけに、各分区がどんなＩＭを準備してきたか、非常に興味があった。ＩＭの再開にはさまざまな論議もあったが、実際に再開してみるとすこぶる評判が良かったのも事実だ。

「これでやっとロータリーらしい活動ができる」「ゴルフだけで終える分区の交流から一歩前進した」という声も聞こえ始めた。

ＩＭが完全に再開されたことで分区内の各クラブ同士の横のつながりも深まり、お互いの活動内容も見えるようになってきたようだった。また、各クラブのリーダーはＩＭを通じて自分が成すべきことを自覚し、リーダーとしての地区の一端を担っていく覚悟もできたのではないかと思っている。

各分区ごとにテーマを決めＩＭは展開されるが、特に興味深かったのは東三河分区の「クラブ自慢だ！　フォーラムだ！」というテーマに基づいた発表だった。各クラブが〝我がクラブ自慢〟をしようというものだが、十三あるクラブが次々とクラブ自

慢を壇上で発表していく。正直に言えば十三もあるクラブの話を延々と最後まで飽きずに聞けるのか自信がなかったが、これが実に面白く発表されたために時の過ぎるのを忘れてしまった。場内は爆笑の渦に終始した。それ程楽しかった。

自分のクラブの良さを探し、見つめ直すことはクラブの活性化を促し、またロータリーの歴史を学ぶことにもつながっていくように思えた。

また、東尾張分区のＩＭは〝これぞＩＭ〟と言える分科会形式をとった見事な研修会だった。このように各々のＩＭはＩＭリーダーの思い入れが、強く表れて個性ある企画であった。

どちらにしても画一的なロータリー活動だけでは、ロータリーを本当の意味で楽しむことは難しい。壇上でロータリー論を演じ勉強することも大切だが、〝楽しんでやろう〟〝学んでやろう〟という気持ちを持つことが、ロータリアンとして自己研鑽をする上では重要なように思う。

一つの目標を達成。復活したIM

二〇〇七年二月一日発行　ガバナー月信より

三月十八日（日）東三河分区のIMが田原の華山会館で開催されました。この日で当地区八分区のIMが全て終了しました。久しぶりのIM開催のせいでしょうか。どのIMもきびきびと会議は進行し懇親会は生き生きとして互いのお喋りに花が咲き、目が青年のように輝いていました。再出発へ向けてのガバナー補佐さんの意気込みが感じられる素晴らしい創意工夫のある企画でした。そのIMですが、内容別に大別してみました。

①各クラブの目玉プログラムや自慢の種の披露

②基調講演プラス会員によるテーマディスカッション

③パネルディスカッション

④基調講演

の四つに分類できます。しかしIMはどのパターンでもよいのです。その目的の第一は分区内のメンバー交流です。名刺交換をしてお喋りです。

次にクラブの相互理解でありロータリー研究です。隣のクラブが行っている奉仕活動を貴兄はどれだけ知っていますか？　ゴルフ会や飲み会で近隣のロータリアンと肩を寄せた時にどれだけロータリーを語っていますか？

小生もほとんど語っていませんでした。しかし会長、そしてガバナーと役割が変わるにつれて、自分から、周りからロータリーを語り、周りから語ってもらうようになりました。

公式訪問での奉仕活動報告はショックでした。ＩＭもまたショックを受けました。それは仲間のクラブのことをまったく知らなかったからです。自分達のクラブより日の浅いクラブがとんでもない（私にしてみれば）奉仕活動を行っています。それも少ないメンバーでありながら…であります。

馬鹿みたいに（失礼！）毎年毎年樹を植え続けているクラブ、毎年〝水の浄化〟をテーマにしているクラブ、奨学金をせっせと積み立てているクラブ、ＷＣＳを自分達だけで（原則通り）行っているクラブ、かくして枚挙にいとまがないのであります。

これらの事業を見せつけられては〝二十二～二十四号を知っているのか！〟と叫ぶ声

が出てこないのであります。その精神を我知らぬ気に堂々と各々のクラブは奉仕活動を行っているのであります。

これがクラブの誕生以来の歴史となっている伝統奉仕活動であればガバナーとして自分を、どう納得させ収拾し次なるステップへ進むかを助言できずうつむくしか仕方ないのであります。その奉仕に敬意を表しこそすれ批難すべきではないのであります。

地域に認知されるロータリーとしては、このコツコツ作業を積み重ねることが大切なのです。

クラブをまとめあげ、クラブメンバーの心を一つにするイベントとして評価しても、やはり対極としての目である社会奉仕の原則をクラブリーダーが見守って梶を取るべきでありましょう。

あちらに揺れ、こちらに揺れながらバランスを取りまろやかなクラブにする努力をクラブメンバー全員で行うべきでしょう。

それにしてもIMの再開にあたり素晴らしいスタートを切ることができました。それは①各クラブ代表が参加したこと②パストガバナー、現ガバナーを招待したにしろ「主」

ではなく「従」として扱ったこと③手作りを意識したこと④実をとる工夫をしてくれたこと等々があげられます。

あくまでもIMの主役は分区内のクラブであります。そして参加ロータリアンの皆さんであるべきです。

IMは「交流と勉強」という要素を求められていますので様々な工夫が今後求められると思います。この原点に立った工夫ある誠意ある企画がないと再びIMは飽きられると思います。次年度のIMへの参加が楽しみです。

GSEの成果と、私の〝やくざ英語〟と

四月十八日、私はアメリカへ向かった。渡米の目的はGSEでアメリカを訪れているメンバーの激励・視察と、第六一七〇地区の地区大会への参加だ。

GSE（Group Study Exchange）は、ロータリーの二地区間で職業をもつ社会人グループを相互に派遣し、相手国の産業や文化風習などを理解し合

い、国際交流の促進を目的に展開されている。奨学生制度や交換留学生とは異なり、職業をもった社会人を交換するという部分が、ＧＳＥの特徴だ。今年度の第二七六〇地区は、アメリカ南東部のアーカンソー州第六一七〇地区とグループ交換を行った。

研修期間は四月七日からの一ヶ月間。参加メンバーは各クラブから選抜された精鋭五名。会社経営、市役所勤務、税理士などと職種もさまざまだ。期間中はホストファミリー宅で過ごし、自分の職種に関連する企業や施設を見学したり、ミーティングに参加するプログラムが組まれる。

四月二十日に開催される第六一七〇地区の地区大会では、プログラムの一貫として、メンバー全員が各自プレゼンテーションすることになっていた。

地区大会当日。参加したのは八十名程度。人数には少々拍子抜けしたが、その前でメンバーは英語でプレゼンテーションするわけだ。私にも挨拶の場面が設けられていた。しかし、日ごろ使わない英語でのスピーチだけに冷や汗をかいた。自己紹介まではよかったが、お土産で持っていった絵画の説明をする部分では、素敵な絵だと言うつもりがなぜか『Ｔｈｉｓ ｐｉｃｔｕｒｅ ｉｓ ｖｅｒｙ ｅｘｐｅｎｓｉｖｅ（大変高価な絵です）』と言ってしまい、会場は大爆笑。挨拶が終わってから「どう高価

なのか?」という質問まで受ける羽目になってしまった。

こんな私の英語に対して、GSEメンバーのプレゼンテーションは非常に素晴らしかった。自分で制作したパワーポイントの資料を使いながら、実に流暢な英語で発表していく。堂々と発表し、会場では参加者とコミュニケーションを取る彼らを見て、〝職業研修・文化交流・フレンドシップ〟というGSEの目的はしっかり果たされていると実感した。

地区大会の後は地区大会会場となっていた大学の副学長のお宅で、二十人程度のパーティーが催された。手作りの料理でもてなされたアットホームなパーティーには気持ちが込もっており、とてもあたたかいものだった。GSEメンバーも〝さくらさくら〟を着物で踊って披露し、拍手喝采を受けていた。

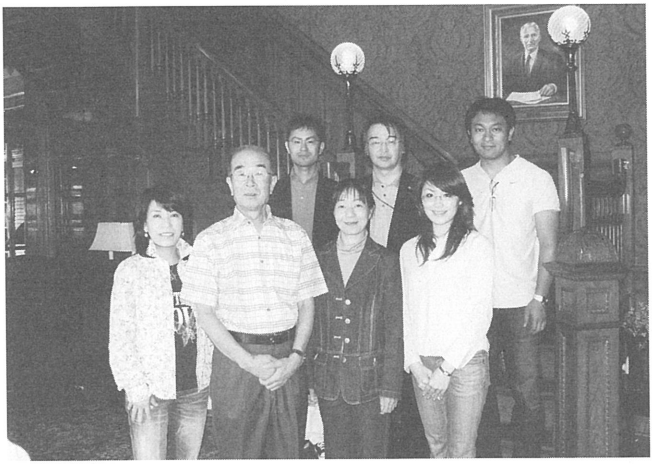
しかし、これまでの人生を片言の英語でなんとか切り抜けてきた私だったが、このようなパーティーの席で普通の会話を聞き、話すという能力がないことに気づかされ、大変がっかりすることになった。女房に言われる〝やくざ英語〟ではやはり駄目なようだ。

私自身はがっかりしたが、GSEメンバーはこの経験を、きっと日本でこれからの

人生で活かすことができるはずだ。これぞ、人作りロータリーだと思う。

ところでこの渡米中は、米山奨学生であり現在はアメリカのフィラデルフィアで整形外科医をされている韓霏先生に、飛行機の予約や道案内などさまざまな面で助けられた。韓霏先生とは名古屋大学に留学されていたときお世話したご縁で、今も交流させていただいている。

先生のきめ細かなアシストのお陰で無事に視察応援旅行を終えることができた。滞在中はありがとうございました。



GSEの派遣メンバーの応援に、アメリカ・アーカンソー州へ。これからを担う若いパワーを嬉しく感じた。

若者たちに、夢をつなげて

四月二十八日、第二七六〇地区の友好地区である第二八三〇地区（青森）へローターアクト代表の内田正美君を囲んで遠山堯郎君（名古屋瑞穂ＲＣ）、服部良男君（岡崎ＲＣ）、加藤康治君（一宮中央ＲＣ）らと弘前へ出掛けた。新世代・ローターアクトの交流会を開催するためだ。途中、板柳町へ立ち寄って、渡部忍氏（板柳ＲＣ）らのお力で、両地区ローターアクトクラブによる「板柳宣言」を採択した。毎年両地区のローターアクトクラブの交流に努めようとするものだ。

翌二十九日、弘前城の桜の、午前十時と午後三時の彩りの違いは、二度と見られない見事さであった。

ガバナーとしての一年の終わりが近づいた六月二十四日、嬉しい出来事があった。それは新しいローターアクトクラブの創立総会が行われたことだ。第二七六〇地区では九番目のクラブ、「豊田広域ローターアクトクラブ」の誕生だ。八番目の名古屋名城ローターアクトクラブ誕生からは十二年を要したが、我が豊田ロータリークラブを

はじめ、豊田西、豊田東、豊田三好、豊田中の各ロータリークラブから提唱され、目出度く新ローターアクトクラブとして立ち上がったのだ。

ロータリーは次なる世代の育成のための、さまざまなプログラムを持っている。ロータリーセンターを卒業し世界平和のために働く頭脳集団の育成や、ロータリー財団奨学生、青少年交換…。その多くは、地球規模で物を見て考える青年グループの成長のための支援活動になっている。ローターアクトクラブもその一貫で、身近な問題にも着目し、明日を考える青年に育って欲しいというロータリーの願いから作られた。

ローターアクトクラブは、世の中に多くある他の青年サークルとは一味も二味も異なる。そこには、未来を見つめるリーダーとなるよう励んで欲しいという願いが込もっている。私は、新しい集に参加する若者に激励の言葉を贈った。

「豊田広域ローターアクトクラブ」の誕生は齋藤年度の最後の思い出に相応しい花を贈ってくれた。

一期一会に感謝して

二〇〇七年六月二十五日　ガバナー月信より

只今、梅雨の真っ只中。中学生の頃の「来る日も来る日もジトジト雨で、なめくじが家中を這い回り、妙にアジサイの紫とうすピンクが目に美しく…」の梅雨とは趣が違ってしまったようです。集中豪雨型とでも申しますか、激しい雷雨型です。

去る六月四日、豊田商工会議所四階でローターアクト入会予定者のためオリエンテーションが開催されました。私に与えられたテーマは『ロータリーについて』（十五～二十分）でした。「一九〇五年アメリカのシカゴに住む弁護士ポールハリスという人が…」と喋り始めました。「…そしてアーサー・F・シェルドンという経済学部卒業の人物が新しく入会し、彼は…」とお喋りを続けている途中に『俺はこの初対面のロータリーを知らない青年達に何を伝えようとしているのか』という思いが頭の中をよぎりました。途端に頭の中が真っ白になって、パニック状態となりました。

「日本のロータリーは戦前あまりにもエリート集団であったため、戦後は…」と続く頃には落とし所が決められずに『ロータリーについて』は終わりになりました。しかも久

しぶりに汗びっしょりという始末でした。

エレクトの頃から喋る前は草稿し、所要時間内かどうか、何を伝えたいのかを考えて事に臨みました。今回は『ロータリーについて』なら何分でもノー原稿で話せるという自負がありましたのでまとめも考えずにお喋りをスタートしたのでした。まさにお喋りでした。うぬぼれ、思い上がりの成せる技だったのでしょう。ガバナーも終わりの六月に入って「ロータリーとは」を語れないとは情けない話です。「ロータリーの発生史と運動の歴史と今」を自分のお喋りの時間に合わせてチャレンジし草稿しておくことの大切さを思い知った出来事でした。

月信も十三号になりました。今年度は地区内ではどんな組織上の変化があったのかを以下に要約してみました。

①危機管理委員会の新設

青少年保護の為の（いわゆるセクハラ防止のための）委員会が地区に義務づけられました。問題発生時に解決への努力をしないクラブは罰則（〇七～三十七号）が定められました。

②研修委員会～ロータリー情報委員会の新設

ロータリーを退会してゆく仲間の多くは、ロータリーについて知らされることなく去って行きます。各クラブでは新入会員のためのオリエンテーションが行われているのに何故なんでしょう。地区としての情報交換の場を設け、検討してみたいものです。

③地区指導者育成セミナーの新設

ＤＬＰ（地区リーダーシッププラン）が当地区に導入されてから十年になります。その時に②と③はゆくゆく導入することになっておりましたので新たに設置しました。地区大会と前後しての開催が望ましいようです。

④ロータ－アクトの新設

九番目のロータ－アクトクラブが豊田広域ロータ－アクトという名前で設立されました。提唱クラブは豊田ＲＣ、豊田西ＲＣ、豊田東ＲＣ、豊田三好ＲＣ、豊田中ＲＣの五クラブです。大いなる発展が期待されます。

⑤ＩＭの再開

一時お休みをいただいていましたインターシティミーティング（ＩＭ）が、八人のガ

バナー補佐さん達の努力で見事に復活しました。そして実に楽しく嬉しそうな会の進行でした。

⑥広報委員会の準備

この委員会は、ロータリーの中では重要な委員会として扱われていながら、いつの間にか開店休業状態となってしまいました。今年度は、青木勇作委員長（岡崎RC）さんが、パワフルなリーダーシップでクラブ委員長会議を開催するなど、次なるプログラムの模索が進行しているようです。

⑦規定審議会の開催

三年に一回の規定審議会がシカゴで開催されました。

出席は六〇%→五〇%、ガバナー補佐のクラブ出席は三〇%未満でもよい、PETS、地区協議会に出席しない会長エレクトは？人頭分担金は四十三ドル→五十ドルと増額、ロータリーの入会資格の緩和等々あります。あまり大きな制定案はありませんが四大奉仕部門が定款に明記（〇七～二十九号）されたことは特筆すべきであります。ロータリー精神を再確認することの大切さを訴えていると考えられます。

雑把にピックアップしただけでもこれ位あります。各委員会毎の変化（改革）を取り上げればまだまだ沢山あると思われます。いずれにしましても地区内組織の整備は江崎エレクト、片山ノミニーと引き継がれ、凛としたロータリーをめざす組織へと改組されていくものと考えられます。

最終の月信は、自分の恥、ゆるみをお伝えするものになってしまいました。やはりロータリアンであるからには、〝ロータリークラブって何ですか〟という一般市民の方々の質問にまがりなりにも答えられなくては、ロータリーバッジをはずさなくてはなりません。ガバナーを拝命したお陰で、その質問に答える機会が沢山ありました。そこから派生する教科書的トレーニングに恵まれました。でも、自分のロータリー観はできないままでした。ロータリーとは、を答えなくてはならないガバナーとしてのプレッシャーを楽しみました。楽しいプレッシャーの続く一年間でした。

各クラブの会長・幹事さんにおかれましては、次年度も貴クラブ発展のために〝ロータリーを学ぼう〟と続けられますよう祈念して止みません。一期一会の二〇〇六～二〇〇七年に感謝。「還た塵顔を洗うを得たり」に感謝しつつ…。

〝野次馬ガバナー〟の一年を終えて

ガバナーノミニーに選出され、〝やる〟と決めて以来、どうせやるなら徹底的にロータリーに賭けてやろう、私はそう心に誓っていた。任期終了時に「もう一年、ガバナーをやっていたい」そう思えるくらいの楽しみ方をしたいと思っていた。

実際、ガバナーの一年間は何でもやってやろう、見てやろう、勉強してやろうの精神で〝野次馬ガバナー〟となり、さまざまなロータリーの行事に顔を出した。同期ガバナーの地区大会にもできる限り出席したいと、日本の全三十四地区のうち、半数以上の二十四地区の地区大会に足を運んだ。

その甲斐あって、私はさまざまな出会いに恵まれ、そこから数々のことを学んだ。友情も広がり、友人の輪も広がった。ガバナーの同期である青森の鐘々江義光君、宮崎・鹿児島の富永国俊君、福島の寺島岩男君らとの出会いは、私の人生の中での大きな収穫となった。酒を飲み交わすうち、ロータリーに対する真剣な姿勢にお互い通ずるものを感じるようになった。

また、ガバナーの私を支えてくれたガバナー補佐八名と地区幹事の皆さんには、今も深い感謝の気持ちを持ち続けている。

次に掲載するのは、ガバナーとしての一年を終える少し前に行われた地区役員及び会長幹事懇親会での挨拶文だ。本当にありがとうございました。

～一年間ありがとう～

改めまして、今晩は。ただ今はお見苦しい映像をお見せし、恥ずかしいショットが多々ありましたがお許し頂きたいと存じます。感動を一年間有難うございました。

短くもあり、長くもあった一年間。やっと、この日を迎えることができました。ガバナー事務所スタッフ一同と二人三脚で、事を進めてまいりました。馬脚を現すことなくホッとしている所であります。

昨年の三月十一日に開催された地区チーム研修セミナー、そして三月十九日のＰＥＴＳで幕を開けた今年度。しかし、この顔ぶれの皆様方との会合は、今日で最後であります。一期一会に感謝致します。

まず第一に、八十一クラブの会長、幹事さんに厚く御礼申し上げます。

二番目にパストガバナーの皆様方と、八人のガバナー補佐さんに御礼申し上げます。とりわけ研修リーダーであり、パストガバナーの岡部君は「ガバナーの好きなようにやればいい！」と励ましつづけてくれ、大きな大きな支えとなっていただきました。また、ガバナー補佐さん方はＩＭの再開にむけてその企画力と指導力とで大成功

に導いてくださいました。「ＩＭはやはり毎年やろうよ」と大きな反響があり、とても嬉しく思っております。

三番目に、地区各種委員会・委員長の皆様方は、ガバナーのお守り役として、ガバナーの成長を見守る教育担当係をお務め下さいまして、厚く厚く御礼申し上げます。

ＷＣＳ、ＧＳＥ、ロータアクト、インタアクト、ライラそして青少年交換などのプログラムに参加し、そのプロジェクトに長年かかわってきたメンバーの「心」と「態度」から、沢山のものを頂戴いたしました。ロータリアンとして、大きな財産をいただきました。少しは成長できたかなと思っておりますので、八十年後にでもチャンスがあれば、もう一度ガバナーをやってみたいと思い始めております。

今晩は地区の打ち上げです。お時間の許す限り、メンバー交流を行ってくださいますようお願いして、一年間の御礼の挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。

ロータリーを学ぼう

二〇〇七年五月一日発行　ガバナー月信より

各位におかれましては、元気にお過ごしのこととお慶び申し上げます。今年の五月は昔と変わることのない、さわやかな空気とまぶしいばかりの陽の輝きとつややかな緑とを私達に与えてくれるのでしょうか。

お互いに各々の役職を拝命してから十ヶ月が経ち、余すところ二ヶ月となりました。各クラブの長所・短所を厳しくチェックして、特にクラブ運営が原理原則に従って行えたか運営できたかを反省しながら次なる会長幹事さんに引き継がれることを切に希望します。

私は公式訪問中に「スリーピングメンバーの対処はどうするのがベストでしょうか」との質問を二、三のクラブから受けました。その質問に我と我が耳を疑いました。会員の条件（資格）をよく御存知でないのでしょうか？

またPG豊島さんのお話の中に「…例会に妻を代理出席させたり、社員を代理として奉仕活動に参加させてはどうかという好ましからざる話を他地区で聞いた…」とありま

した。この二つの事例は多分現在の日本ロータリークラブの実情の一面を端的に表現しているように思われます。つまりロータリーの定款・細則が読まれることなくクラブが運営されロータリアンがランチタイムメンバーとして十年二十年教育されることなく放置されていることの証であります。

私はガバナーを拝命するにあたり「原点回帰」を掲げ三つの提案をさせていただきました。

その三つ目が「ロータリーを学ぼう」であります。

当地区内には次年度理事役員が決まると直ちに「定款・細則を読み合わせる会」を開催しているクラブがあります。

また隔月の第四例会をロータリー情報例会としてクラブ全員でロータリーの勉強を行っているクラブもあります。

同じようにクラブ全員を三班に分けて年二回はロータリー情報学習会へ出席することを義務付けているクラブもあります。

しかし、そのようなクラブにはできれば公式訪問したくないのであります。ガバナー

が評価されますから汗が出ます。負けないように手続要覧を読み返し、「奉仕の理念とは」を暗唱し（でもすぐ忘れますが…）ガバナーに筋金を入れてもらえたのだと胸を張って訪問しました。

妙な話はまだあります。それは「こんな大切なことはクラブのメンバー全員が総会で決めたほうがよい」と時々聞こえてきます。とても立派で民主的で説得力があります。ロータリーには年次総会が十二月に一回あるだけです。全員で決めることはありません。しかしながら全て理事会で決定され遂行されます。

ひどい話ですが会長ノミニーが指名委員会で決定されたら、ある長老が「誰々さんが年長だし入会も早いだろう！」と大声で訂正を求め、その通りの人事となり会長ノミニーの変更を指名委員会の決定もなしに会長が決めたという話もあります。クラブの長老（パスト会長）運営がままみられますが、あきれる話であります。貴兄のクラブはいかがでしょうか？　まだまだこんな話は沢山あります。

さて、次年度に申し送って欲しい事は

①クラブは理事会が管理運営を行う。

②クラブ奉仕委員会は定款の規定に沿って活動する。
③出席～メイクアップはルール通りに。
④各種奉仕活動が長期化しているものは整理を考える。
⑤長期ビジョンを立案してみる。
⑥職業奉仕に軸足を置き、対外奉仕はもう一方の片足をそろりと出すように。

会長さんが〝やっぱりロータリーの学習会を開こう〟と呼びかけて欲しいと思っています。教科書は沢山ありますので教養科目としてロータリー学の蓄積はいかがでしょうか？

職業奉仕で己を高めロータリー学で品格を磨き言行一致への望外の効果を期待したいものです。

私は二回のラオスへのWCS活動に参加してこの言行一致を思い知らされました。ロータリーの思想史を学習した定款・細則を頭に入れてもロータリアンとしての日常的な行いが執れないのです。

水谷委員長のお伴で参加したラオスWCS活動で大勢の地区メンバーのお姿を見て恥

じ入るばかりでした。

あと二ヶ月！　思い残すことのないようまとめと次年度への期待を込めて整理に入りたいと思っています。

未来を見つめる目がくれた〝自信〟

二〇〇七年六月一日発行　ガバナー月信より

梅雨入り間近なのに、この快晴はどうしたのでしょうか。心地よい天気が続きます。会長幹事さんにおかれましては、最終例会の準備はお済みでしょうか？それどころではない？そうですか！最終例会まできちんとおやり下さい。それでこそ会長です。

クラブ会長の方針は、『Ｌｅａｄ　ｔｈｅ　ｗａｙ（率先しよう）』で大成功だったこととお慶び申し上げます。それもこれも幹事さんの陰ながらの支えがあったからこそと推察いたしますが、いかがでしょう。

ところで、この一年間本当にありがとうございました。公式訪問、地区大会、そしてＩＭで多大のご協力をいただき、成功裏に幕を閉じることができます。心より御礼申し

上げます。

私は一年間、「ロータリーに対する思い入れ」だけで夢中で過ごしてきました。理論武装しながら、向上心に燃えしゃにむに突き進んできました。自信に満ちあふれていました。が…公式訪問も半ばを過ぎ、地区各種委員長会議を一つ一つ消化するにつれて、次第に自信に揺らぎが出始めました。ＷＣＳでラオスに二回、ＧＳＥでリトルロックへ応援、第二回、三回の各種委員長会議の開催と出席は、この揺らぎをますます大きくさせていました。

ロータリーは職業奉仕が中心にあるはずなのに、それを忘れたかのようなプログラムの横行は、〝これぞロータリーの運動〟とばかりに目立ちます。疑問が湧きます。しかしながら、このプログラムへの参加は自分で提唱した地区方針の一つ「ロータリーを学ぼう」なのではないかと気づきました。おごりのあった自分に気づきました。限りなく謙虚への努力、自己研鑽への努力がロータリー運動ではないのか。人助けというボランティア活動への参加は、自分の人生の「学び」の一つではないのか？人助けなんてうぬぼれるな、と。

ＧＳＥの応援に四月十九日～二十六日、アーカンソー州第六一七〇地区へ行き、地区大会でスピーチしました。ブロークンイングリッシュと日本語とのミックスで…「ロータリー運動の中心は次世代を育てることです。Ｒープログラムは人道支援に横ぶれしてきて正しくない」とスピーチしました。

四月二十八日、二十九日、第二八三〇地区（青森）のローターアクトとの交流会打合せに参加し、五月十三日　当地区のローターアクト第十七回年次大会に参加しました。満三十歳で卒業する十人の卒業式は感激の極みで涙しました。私ももらい泣きしました。ローターアクトに参加し自分が成長できた喜びの感謝のスピーチばかりでした。その他に私はインターアクト大会、ライラセミナー、米山学友会、ロータリー奨学生、青少年交換などのプログラムに参加しましたが、未来をみつめる青年の目と姿は、明るく活気に満ち、私達ロータリアンに自信を与えてくれます。

ロータリー運動の基準値の線は、クラブ奉仕、職業奉仕、そして新世代育成奉仕で線引きすべきでしょう。そこから先の社会奉仕や人道支援プログラムは余力のある人や、ロータリアン教育プログラムとして参加すべきであり、そこに目的を置くべきではない

と考えます。ロータリアンのロータリー嫌いの原因は、この社会奉仕や人道支援プログラムに参加するメンバーがヒーロー扱いされ、そのプログラム達成のための寄附集めに得心いかないのが大きな要因と考えます。私の心は右に左に揺れ、ロータリー運動の何たるかを求め、地区内のロータリー活動の実践症例を目で確かめ肌で感じるも何ら結論が出ないのでありました。しかしこの一年を終わるにあたり、私のロータリー運動のこの線引き作業に結論が出たような気がします。ロータリー運動は、平均値として新世代育成奉仕までを義務的なプログラムとして扱い、人道支援は自主的プログラムとして扱うとすれば、息が楽になり、ロータリアンの寄附への自縄が解けます。自縄が解ければじゃあ俺も参加してみるか！とポリオ投与ＷＣＳへ参加するメンバーが増えてくると確信します。

人道支援プログラムはおろか新世代育成プログラムにさえ参加しないメンバーは、きっとある種のうしろめたさがあるはずです。しかし、それで良いのだという確信を持つべきです。佐藤千壽先生の「ロータリー素数論」であります。人それぞれのロータリー論があるはずです。そしてそれを認め合うべきです。言い争いをすれば相手の言い

分がはっきりしてお互いに歩み寄りの作業が自然に行なわれて、ファジーながらもそのロータリー論が確認できるのです。

七月から新しい年度が始まります。また考え直し言い争いしながら一年を過ごしましょう。ロータリーって楽しいじゃないですか！　最終例会で会長さんがクラブ史上に残るすばらしいスピーチをされることを切に希望してやみません。そして次なる年度は地区委員として活躍されることを期待申し上げます。

一年間に幕を降ろして

二〇〇七年八月二十五日発行　ガバナー月信より

前略

短くもあり長くもあった私達の一年間に幕が降りました。本当に本当にご苦労様でした。

終わりにあたり一つだけ気になることがあります。

それは地区内の会員数であります。

貴クラブの会員増強の成果はいかがでしたでしょうか？　会員増強～退会防止が大きなテーマとして扱われるようになってから久しくなりますから、この言葉は空念仏と

なってしまったようで残念でたまりません。

日本の経済環境が好転し、一旦は去って行った、様々な業種の仲間がぼつぼつとロータリーへ戻ってきてくれています。このことを考えれば地区内会員数がゆっくり増加、ないしは下げ止まりという現象になっても良いはずです。地区内会員数の動向のデータは経済環境の好転は必ずしも会員増加の要因とはならないことを示しています。

これは大いなる警鐘です。私は地区委員会に地区研修委員会とロータリー情報委員会とを設置しました。『仏造って魂入れず』とはまさにこのことです。

会員の為の研修委員会などは、機能しなかったことになります。それともあと三～四年間辛抱強く成果を待ちましょうか？　会員の減少が止まらないのをみると、退会防止の努力は無駄だったのです。

何故でしょう。

ロータリーは今や、

一．ステイタスシンボルのある団体なので入会させてもらった。しかし自分にとってステイタスシンボルと評価できなかった。

一．ビジネスに有利と思って入会したが、その効用はまったく無かった。
一．社交クラブ（大人のサークル）と感じて入会したが、業界の集まりの方が楽しい企画が多い。

そんなこんなの評価を受けながら会員が短期間の在籍で去って行くと私は考えています。

ロータリーの発生と運動の発展史の中で育てられ形成されたロータリー思想（ロータリー哲学）はごくありふれた企業活動の日常性の中で最近では理念の上滑り現象となって大部分のメンバーには受け入れられず（考えてもらえず）排除されている。それがバブル崩壊後の日本における大量メンバーの退会の大きな要因です。ステイタスシンボルグループへの幻影、ビジネスチャンスの場を与えてもらえずに（当然のことですが）二割の会員が去っていった。

端的に言えばクラブや地区を越えたリーダーのロータリーへの思い入れは、熱気は、一般メンバーには正しく伝わらず「ロータリー大好き人間」として処理されているのは悲しいことです。

ところで、どうしたらこの現象を止められるのでしょうか？

①ロータリーは世界平和の達成を目指します。

②ロータリーは自己研鑽と職業奉仕に徹します。

この二つを比較したら、「志」の高さの違いがあります。ロータリアンの教育の重要性が盛んに云われますが、どのようなプログラムが具体的に提示されているのでしょうか？　この「志」の違いをそれぞれに学習するのでしょうか？　会員参加型の教育なのでしょうか？　つまり「自分の人生観とどうマッチングさせるか」を納得させないロータリアン教育は成功しないと考えます。

期末にあたり地区内会員数が純増に転じない事を愁うるとともにガバナーとして痛く反省し次年度へ期待するものであります。各クラブ会長・幹事さんにおかれましてはクラブ強化のため次年度も一層の御協力をお願い申し上げます。

本当に有難うございました。

草々

エピソード3

これから託すもの…
「中部名古屋みらいロータリークラブ」の設立

二〇〇八年。正月気分も抜けかけた一月下旬、友人から電話がかかってきた。「大須ロータリークラブの友達と飲んでいるが、ロータリー財団学友による新しいロータリークラブを作りたいと言っている人がいるのだが…」と。このご時世に拡大なんかもあったものではない。無い相談だと思った。第二六三〇地区（岐阜・三重）に学友が七～八名、第二七六〇地区に十～十二名は候補者としてピックアップされていて、二十名以上の学友は何とか参加してくれるから、創立基準の二十名は固いとのこと…。増強もままならない当地区にとっては嬉しい話だが、創立までにはすさまじいエネルギーが必要と考えられる。

「相談するのが何で俺なんだ」と思ったが、託された望みは〝形〟にしなくてはならない。当地区ロータリー財団委員長・深谷友尋君の見事な組織作りに引っ張られ、秋も深まった頃には若い学友とその仲間二十数名の顔が見えた。そしてクラブの輪郭

も…。クラブは①中部名古屋みらいロータリークラブと名づけ、②ロータリー財団学友とロータリーファミリーを基本資格として、③年会費五万円を払い、④毎金曜日夜七時三十分に例会開始。一日の仕事を終え、散々伍々集まって様々な語らいをする、従来には無い日本のロータリークラブ、新しいロータリークラブを目指し、ステイタスは専門知識と燃える奉仕の心、そして活動力だ。

実験的に動き出したクラブは、未来の夢に続くクラブ。これからを託すロータリアンの誕生を予感させてならない。

昭和40年代中頃の長女、二女、長男と私。家族で山へドライブに出掛けたときの一枚。

おわりに

二〇〇四年六月に始まった「齋藤君をノミニーに推薦する、しない」と騒然となったクラブの物語から、二〇〇七年六月の地区役員・会長幹事会の打上げまでの記録は、実につまらない私のガバナー三年史です。自分史のごくごく短い三年の思い出話でしかないのです。いわば墓誌なのです。この物語に人の名がない部分があります。傷つけ傷つけられることを避けようとしてのことです。ですから実話はもっと人間臭く、こぶしを振り上げたくなる事もありました。平凡な人間には波風はないものなのです。それでよいのです。

でも最後に記録しておきたい事があります。それは二〇〇七年六月二十八日の豊田ロータリークラブ最終例会です。それは「福好」で開催され、川嵜会長、杉浦（敏）幹事がガバナー事務所スタッフのために催し、演出してくれた宴でした。スタッフ全員に花束を渡し、その労をねぎらってくれました。涙があふれ止まりませんでした。本当は僕達が川嵜会長、杉浦（敏）幹事に花束を渡さなければいけなかったのです。かくして原点回帰は終わったのです。

ガバナーというプロテクターをまとい、
異次元の世界で　異次元の言霊を語り、
合点されたと帰還する異邦人のように‼
身も心も定まらず苔むす老木の洞のように‼
風の吹き抜く柳枝のように‼
「それでもあと三ヶ月　異邦人のままで」と、
やはり見得をきらせてくれる異次元への憧憬か、
所詮くり返されるシジフォスの神話か。

あとがき

この本は伊藤秀雄君にすすめられスタートし、豊田共栄サービスの鈴村君、安田君、D企画の小出嬢のお三方に励まされ、背中を押され、あきれられ、一年余りをかけてまとめました。ですが、色々な物語や人との出会いの事が、まだまだ書き残されています。

ビジョンを描くのは得意ですが、まとめるのが大の苦手の私には、この冊子はそれでも大きな業績集です。ですから、やっぱり誰かに読んでもらって、〝おい！これって何なのだ？〟と聞いて欲しいのです。僕にとってガバナーは雲の上の人でした。面と向かっては質問も出来ない存在でした。でも、今やガバナーはどんどん身近になり、ロータリー学級の学級委員的存在に祭りあげられました。パストガバナーと言う方も言いにくく、言われる方も面はゆいのです。これからは〝やぁと言おうよ〟です。これからもよろしくお付き合い下さい。

ガバナー事務所の仲間とともに

地区監事　渡辺 祥二

地区幹事　藤井 伸三

地区副幹事　天野 勝美

地区会計長　伊藤 康司

地区副幹事　鈴木 元弘

地区副幹事　秋田 敬治

地区副幹事　梅村 正明

地区副幹事　木下 桂一

地区副幹事　松井　勇

地区副幹事　河木 照雄

地区スタッフ　鈴木秀和

地区スタッフ　孕石 邦雄

地区副幹事　酒井 法丈

地区スタッフ　松井 博文

地区スタッフ　鈴村 幸伸

地区スタッフ　杉浦　毅

地区スタッフ　大山 輝美

地区スタッフ　中根 冨夫

地区スタッフ　杉浦 正明

この仲間の応援がなければ
ガバナー事務所は
運営されませんでした。

資料

活動アルバム

▲ 2006～2007年度ＲＩ会長・ウィリアム B.ボイド夫妻と共にアメリカ・サンディエゴで。

～ 2006年4月に行われた地区協議会で、斎藤年度への引き継ぎが行われた。～

▲ 当時の2760地区ガバナー・高橋治朗氏より地区旗の引き渡し。

▲ 斎藤年度の所信表明演説。

▲ 高橋前ガバナーから、激励の言葉もいただいて…。

◀ 2006年11月18日·19日。ウェスティンナゴヤキャッスルで行われた斎藤年度の地区大会には、宮崎茂和ＲＩ会長代理のほか、全国からロータリーの仲間が集まった。その時、黒子に徹した仲間達。

◀ ＲＩ会長代理ご夫妻の歓迎晩餐会では、青森2830地区との友好協定を結ぶための調印式が行われた。
地区同士で友好協定が結ばれたのは、全国初。

▲ 宮崎茂和ＲＩ会長代理と歓談。

▲ 基調講演をお願いしたのは、長崎県・大村北RCの佐古亮尊PG。心を打つ内容に思わず涙を流すロータリアンも。

▲ 伝統工芸品を記念に交換

▲ 宮崎茂和ＲＩ会長代理を囲んで。

▲ 地区大会で『ロータリーの森を歩く』と題して、基調講演された佐古亮尊パストガバナー。

▲ アクターズミーティングは楽しい大会でした。

▲ 地区内のクラブを公式訪問することも、ガバナーとして重要な任務。

◀ 各クラブで特色のある歓迎を受けた。
これは豊橋RCでのシーン。古式ゆかしいコスチュームで、ガバナーの私を例会会場まで案内してくださった。

▲ 名古屋中ロータリーの地区大会実行委員のメンバーには大変お世話になった。

▲ 地区スタッフと

▲ 東尾張分区ＩＭは爆笑の連続でした。

◀ 2006～2007年度で完全復活させたＩＭ。各分区がどんな内容で準備し、発表するのか楽しみだった。
分区内の横のつながりも深まり、良い結果となった。

▲ お土産も沢山いただきましたが、公式訪問には少々くたびれました。

▲ 公式訪問最終回、45回目は自分のクラブでした。

▲ アメリカ・アーカンソー州へＧＳＥの激励・視察に。派遣メンバーは国際交流を見事に果たし、役割を終え帰国した。

▲ ローターアクトミーティングにも積極的に顔を出し、若いメンバーと交流。
彼らの熱意や奉仕の気持ちを肌で感じることができた。

▲ インターアクトクラブ

◀ 野球大会に興じて

▲ 第一回ガバナー補佐会にて（於：トヨタ鞍ヶ池記念館ゲストハウス）

▲ ライラセミナー

▲ 東名古屋分区ガバナー補佐
千田 毅氏と柳沢幹事

▲ 東三河分区ガバナー補佐
尾原 脩氏と松井幹事

▲ WCS活動の一環として訪れたタイとラオス。小学校建設や、消防車贈呈などさまざまな支援を行った。
25年余つづく愛知奨学基金授与式にて。

◀ 名古屋みなとロータリークラブのスタッフと。

▲ ロータリーについて、ガバナーについて…2500地区の故パストガバナー田巻明男氏（紋別港ＲＣ）からは、さまざまな面でご指導いただいた。

▲ 豊田ロータリークラブ初代幹事、寺田チャーターメンバー

◀ 岡部研修リーダー（右）には大変お世話になりました。

内藤パストガバナーにはRI会長代理の世話をいただきました。▶

▲ 2006年にサンディエゴで開催された地区協議会。パーティーでの憩のひとときに。

▲ 友好関係を結んだ青森2830地区の仲間とは、今も良い仲間としてお付き合いさせていただいている。

齋藤直美（さいとう・ただみ）

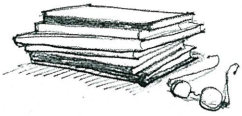
一九三八年（昭和十三年）十一月十日生まれ。医療法人 豊寿会 斉藤病院理事長。豊田ロータリークラブ所属。国際ロータリー第二七六〇地区二〇〇六～〇七年度ガバナー。

【ロータリー歴】

一九七九年二月豊田RC入会。〇二～〇三年度豊田RC会長。〇三～〇四年度RI第二七六〇地区ロータリー財団奨学委員会委員。〇四～〇五年度RI第二七六〇地区ロータリー財団奨学委員会委員。〇四年度ガバナーノミニー。〇五年度ガバナーエレクト。

【主な経歴】

一九六四年名古屋大学医学部卒業。六五年名古屋大学医学部整形外科学教室入局。六六年豊橋市民病院整形外科勤務。六八年静岡済生会病院附属静岡療護園勤務。六九年浜松市遠州病院整形外科勤務。七一年豊田市加茂病院整形外科勤務。七三年斉藤病院開院。医学博士／日本整形外科学会専門医。日本体育協会公認スポーツドクター。日本リウマチ協会登録医。日本医師会公認スポーツドクター。



原点回帰（げんてんかいき）

～あるガバナーの記録より～

二〇〇九年七月三十日　初版第一刷発行

著者……齋藤　直美（ただみ）

斉藤病院　豊田市四郷町森前一六六ノ一

TEL（〇五六五）四四～〇〇三三

FAX（〇五六五）四五～九六八一

印刷・製本…豊田共栄サービス株式会社

装丁……豊田共栄サービス株式会社
　プリントデザイン部

編集協力……有限会社D企画

装画……片桐　幸行（国画会会員）

題字……安藤　豊邨（全日本書道連盟評議員）